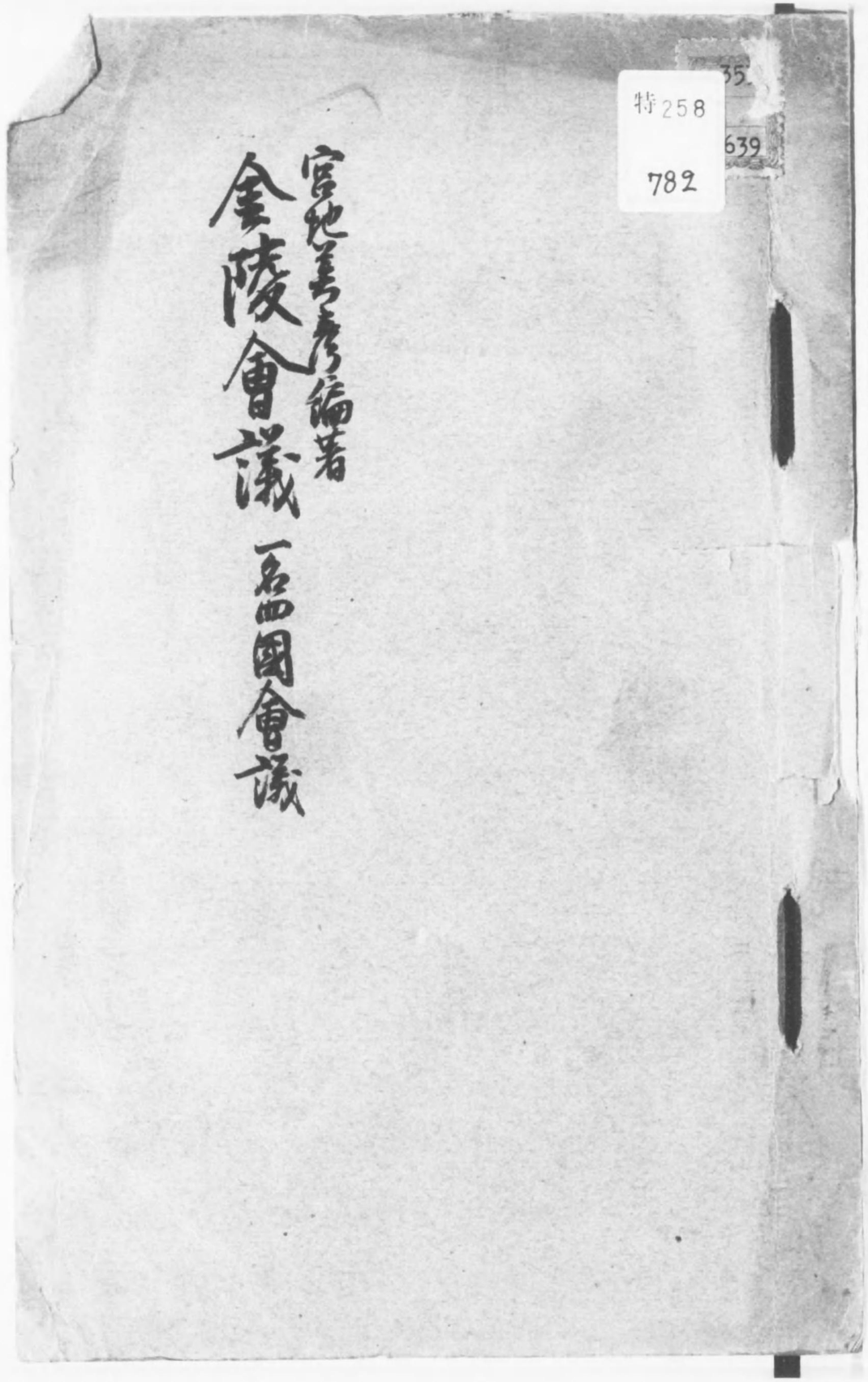
特258
782

始



特258
782

宮地美彥編著

金陵會議一名四國會議

全

宮地美彥氏寄贈本

ハシガキ

世ハ段々ニ開ケ進ンデ行クガ或モノハ大ニ退歩シ悪化シテ来タ。今ヤ我國ハ非常時ダト云ッテ居ルガ、非常時ナル意味ガナカナカ廣汎デ特ニ憂フベキ思想方面ノ非常時ニモ遭遇シテ居ルノデアル。彼ノ政黨解消論ノ起因ヲナス物、或ハ國家ノ儀表トナリ又模範トナルベキ者ガ、却ッテ外部カラ種々ノ疑惑ノ的トシテ攻撃セラレ或ハ醜怪極マル事件ニ係ル刑事被告人トシテ公判廷ニ立ツガ如キ有様デ、其他ノ底民ノ行状モ推シテ知ルベシト云フガ如キ實ニ憂慮スベキノ世態人情デアル。憂國ノ士ガ綱紀粛正ヲ叫ビ、政党解消ヲ云為スルガ実ニ所以ナキニ非ズデアル。然シ如此世態人情ハ決シテ形式的論議スルノミデ立直ルベキモノデハナイ、其病源ノ因ッ来レル処起ッテ之ヲ根絶スベキデアル。刻下ノ急務ハ國民ノ精神教育デアル。國民ガ皆至誠報國ノ大和魂ニ立帰リ、日本國民ノ本心カラ出直シテ来レバ上述ノ世態人情方面ノ國難ハ救済セラルルコトト思フ。所謂思想上ノ非常時ノ大部分ハ茲ニ至ッテ消シ飛バサレル事ト思ハレル。

余ハ感ズル所ガアッテ金陵會議一名四国會議ト称スル此ノ一冊ヲ草シテ今回好ノ士ニ頒ツコトトシタガ、此ノ金陵会議ハ今カラ約六十五六年前四國十三藩ノ議會デアル。其議員ハ何レモ勤王烈士デ想則中ニモアル如ク憂

國ノ士ノミデアル、或議員ハ議會中或公責ノ為メ自刃シテ果タ者サヘアルト云ハレテ居ル位デ今日ノ歴史家ヤ政治家ニモ大ニ研究ヲシテ戴キタイ兵ガ多イ。非常時ノ今日ニ於テ一顧ノ價値大ニアリト信ズルガ故ニ敢テ不識ヲカヘリ見ズシテ未完ノ此ノ稿ヲ左ノ先輩ノ座右ニ呈シテ豫テ史料ヲ惠投セラレ或ハ有益ナル指導報告ヲ与ヘラレタル厚意ヲ深謝シ併セテ又更ニ批評ト御指導ヲ仰ギテ後日ノ完成公刊ヲ期スル次第デアリマス。

宇野東風先生　川田雪山先生　西園寺源透先生　田所眉東先生
兵頭賢一先生　足達儀國先生　横田傳松先生　篠崎甲子次郎先生
豊川英吉先生　高橋彦之丞先生　坂本榮二郎先生　坂本章三先生
西川源次郎先生　玉田栄二郎先生

昭和九年二月二日

編者識ス、

例言

一、本書ハ題シテ金陵會議一名四國會議トイフモ、記事ニハ四國會議ト云ヒ、又ハ金陵會議ト云ヒ、時ト所ニヨリ二者ヲ混用セル感ナリ之レ編者ハ廣義的ニ兩名ヲ全ク全一物ト視テ「何レニテモ全ジコト」トノ考ヲ持テルヨリ自然ニ現レタルモノニテ、別意アリテ然カセルニハ非ラズ。

一、又本文中ニ阿波淡路ヲ阿波藩又ハ徳島藩ト二様ニ記シ、土佐ヲ土佐藩トモ高知藩トモ書ケルモ此亦意義ナキコトニテ、何レニ呼ブモ結局高知藩ト徳島藩ノ事、コトニ明治二、三年頃ノ書物ニモ徳島藩又ハ高知藩トノミ専称セズ阿波藩トモ阿波藩トモ徳島藩トモ唱ヘシ様ナレバ此ニ倣ヒテ隨意ニ両方ヲ用ヒシタル迄ニテ之ニモ別意ナシ。

一、記事中《宇野氏報ニヨル》ノ如ク記セルハ参考史料中ニ掲ゲタル宇野東風氏ノ報告ニヨルコトヲ畧記セリ、其他モ之ニ準ス依テ参考史料ノ條ト参照諒解セラレタシ、

一、所録ノ人物ハ簡單ナ解説ヲ我ガ郷國ノ主ナル関係人物ヲ主トシ他藩ノ分ハ僅ニ最近報告ヲウケレ二ヲ記セルモノデ此外ノ者ハ他日大ニ補正スル考デアル。

一、杜撰千万ナ此ノ一冊、元ヨリ研究ハ足ラヌ資料ニ乏シク大ニ時間ヲ多クカケテ大成スベキデアルガ職業ガラ専門家ノ様ニ何時デモソレノミニ掛ツテハ居ラレヌ故、一應集メ得ル資料ヲ大小トナク可成纏メテ世ノ参考ニ供シ、此ノ拙ナキ不完成ナモノヲ批評シ或ハ研究資料トシテ完全ナモノニシテ戴ク可ク拙イ編輯方針デアル、精疎長短等ノ整調モ亦後日ニ期スルモノデアル。

参考史料

一、直接又ハ間接ニ参考トシタルモノ

高知藩誌　高知藩日誌　宇和島藩維新史料　伊予史
伊達文書　奏任官進退記　高知県勤王者調　國難者調
贈位先賢小傳　勤王烈士傳　宇和島藩日誌　神山県記
吉田藩日誌　石鎚県記　伊予史精義　土佐史要　高知県史要
愛媛県史稿　小豆郡誌　小豆郡維新紀記　高松藩史　枩山史要
明治文化研究　明治維新史ノ研究　谷干城遺稿　金陵日誌
先岡健吉日記抄　隈山治謀録　松下鴬兮先生傳　四國十二藩ヘ
誘説日記　宮地文書　鶴崎毛利文書　徳島県史　熊本宇野文書
防長回天史　改訂肥後藩国事史料　香川県史　大洲藩史料
今治藩日誌

二、参考シタル談話

徳島旧藩士根本熊次郎翁ノ談話　高知藩士依岡珍太郎翁談話

仝森複吉郎翁談話　仝宇野辻成翁ノ談話

三参考史料ヲ与ヘラレタル先輩ノ芳名（順序不同）

東京川田雪山氏　熊本宇野東風氏　松山西園寺富水氏

徳島田所眉東氏　宇和島兵頭賢一氏　大洲豊川英吉氏

愛媛足達儀國氏　愛媛横田傳松氏　今治池上融氏

西條高橋彦之丞氏　丸亀西川源次郎氏　今治玉田榮次郎氏

香川篠崎里次郎氏　坂出岡田唯吉氏　徳島坂本章三氏

右ノ諸先輩各位ヨリ受ケシ御厚意ヲ謹デ深謝シ併テ本稿ニツキ御批評ヲ乞フ、特ニ誤謬ニ付キ御指摘ヲ懇願致シマス。

以上

金陵日誌一名四國會議

目次

一、ハシガキ

二、例言

三、参考史料

四、目次

第一　我ガ國ノ議會

第二　四國會議

第三　四國會議ノ發起

第四　土佐藩ノ誘説ニ十二藩讃同

第五　四國會議建置ノ趣意

第六　第一回ノ四國會議（丸亀會議）

第七　金陵會議

第八　金陵會議所ノ規則

目次

第九　金陵會議ノ議事ヶ項
第十　金陵會議ト他藩トノ交渉
第十一　金陵會規則ヲ改ムルノ議ト金陵會議所ノ廢
附録
金陵會議ニ関係人物ニ就キテ、

金陵會議一名四國會議

宮地美彦　編輯

第一、我ガ國ノ議會

抑モ我ガ國ニ於テ議會トシテコトハ、西洋舶來ノモノデ極ク新ラシイ事ノ樣ニ思ハレヌデモナイガ、之ハ決シテ舶來モノデハナクテ國産ノ最モ古イ歴史ヲ有スルモノデアル。ソレデハ日本ノ議會デ最モ古イモノハト問ヘバ、世ニ廣ク知ラレテ居ル彼ノ神代ニ八百萬神々ガ高天原ニ神集リマシテ天安川原ニ事議リ給ヒシ、所謂高天原會議ダト答ヘネバナラン。爾来幾多ノ大小會議、即チ議會ガ開カレタ事デアラウ。然シ後世ニ至ツテ政権ガ一度武門ニ帰シテヨリ、高天原會議ノ如キ神聖デ且ツ掛ケ隔テノナイ開放的ナ公衆會議機関ハ、殆ド廃セラレテ仕舞ツテ、ソノ必要モ認メナイコトトナリ。稀ニハ極少數ノ相近キ階級者同志ガ相寄リ議スル程ノモノハアツタラシイ。最モ茲デ議會ト云ツテ居ルノハ私的ノ談話集會等ノ意味デハナクテ、公的ニ政治経済等ノ會議

ヲ指シテ云フ意味ナルコトノ断ツテ
徳川幕府ノ時代ニ至ツテハ昌平日久シク
政治ヲ行フテ居タ故ニ衆議機関ニ待ツ
トイフ言葉ハ余リ用ヒラレナカツタ、従ツテ明治、大正ヨリ昭和ノ今日
ニ至ルマデ、一般ニハ議會トイフコト
考ヘラレテ、ソレ故議會トカ會議トカイフ語ガ割合新キ事ノ如ク
ラレル訳デアラウカ。サレド今少シ注意シテミルト徳川幕府ノ末期ニ
於テ專制政治衰微ト共ニソロ〳〵ト議會トイフモノガ頭擡シテ來テ維
新後ニハ段々ト、ソレガ勢力ヲ占ムルニ至ツタ。即チ幕末ニ内憂外患
交々至ツテ國家益々多事ナルニ際シ、幕府ハ之ガ處置ニ施術ニテ、無止前
例ヲ破ツテ、大小名ヤ旗下ノ士ヲ會シテ善處ノ策ヲ諮ツタコト一再ナ
ラズ。又 朝廷ニ於テモ公卿諸侯ヲ召集シテ國事ヲ諮問討議セシメ給
ヒシコト数多度デアツタ。斯クテ各藩ニ於テモ上下諸士ヲ會シテ衆智
ヲ協セ緊急時事ヲ議セシメタガ、之等ハ夫々一種ノ議會デアル。

明治維新ノ政ガ行ハレル様ニナルト益々議會ガ行ハレルコトナリ、先ツ
明治元年正月 朝廷ニ於テハ徴士ヤ貢士ノ制ヲ定メテ議事所ヲ創設
シタ。コノ議事所ハ後ニ公議所、集議院、待詔局、待詔院等トナツテ、順次名
稱、組織、職制等ニ変遷ハアツタガ要スルニ此等ハ当時ノ政府ノ議會デ
アツタ。各藩ニ於テモ明治二年頃カラ藩治職制ニ則リ議會ヲ起シテ藩
治上ノ事ヲ議シタ。其名称ハ議事方、議事所、集議所、衆議院ナドト云
ツテ、マチ〳〵デアツタガ、其議スル所ハ大低一様ニ其藩政上ノ事デアツ
タ。衆議院トイフ名ハ帝國議會ノソレトハ全ク別デ中々面白イ、コレハ宇和
島藩ノ議會ノ名デアツタ。（衆議院事ハ後ノ宇和島吉田両藩談ノ
條ニ詳シ）

然ルニ維新前ノ幕府ノ議會デモ、維新前後ノ 朝廷並ニ各藩ノ議會デモ、維新前
モ大低ハ各其政府ノ諮問府デアツタカラ、今日ノ議會即チ上帝國議會
ヤ府縣會以下ノ議會トハ大ニ趣ヲ異ニシ、ソノ性質ノデアルノガ唯明治二
三年ノ頃、此等ノ諮議會トハ稍其趣ノ異ナル一名四國會議ト名ケタ、所代議ニノシタ一議會

金陵會議ニ於ケル四國會議

ガ四國ニ在ツタ。金陵會議トモ、四國會トモ四國會議トモ云ツテ四國十三藩ヨリ成ル會議、即チ議會デアツタ。以下金陵會議ニツキテ稍々詳シク述ベヤウ。

第二、四國會議

四國會議ハ土佐藩ノ首唱デ宇和島、大洲、新谷、松山、今治、小松、丸亀、高松、阿波(徳島)、吉田、西條、多度津ノ十二藩ガ之ニ賛同シテ出来タモノデアル、ソレ故四國會トモ云ヘバ最初ノ第一議會ヲ丸亀會議トモイフ。ソレハ丸亀ニ於テ開會シタカラデアル。第二回以後ハ琴平デ會議シタカラ金陵會議(琴陵會議トモカク)トモイフ。或ハ四州會トモ四國周旋方會議トモイツタ。周旋方トハ当時外藩トノ交渉周旋ノ任ニ当レル役人ヲ指シテ云ツタモノデ、之ノ周旋方ノ人々ガ各藩カラ撰出セラレテ琴平ニ出張シテ来テ居ツタノデ、斯様ナ名モ附ケラレテ居タ。

云フ迄モナク、四回ハ今ノ高知、愛媛、香川、徳島ノ四縣デ土佐、伊豫、讃岐、阿波ノ四國、十三藩ハ前ニ列挙シタ通リデ其内土佐ハ高知ノ壹藩、阿波モ徳島ノ一藩、讃岐ニハ高松、丸亀、多度津ノ三藩、伊豫ニハ宇和島、吉田、大洲、新谷、松山、今治、西條、小松ノハ藩ガアツタ。

如斯多クノ名ヲ以テハ居ルガ最モ多ク呼バレルノハ金陵會議ト四國會議ノ二ツデアル。本書デモコノ二ツノ名前ヲ多ク用ユル事ニシタ。

第三、四國會議ノ發起

扨テ四國會議ノ発起者ハ誰カ。或者ハ曰ク、板垣退助ナリト断言スルモ、余ハ何故ニ板垣退助ノ発起トスフカ、確証ヲアゲヨトスフ者也。或者ハ又曰ク板垣退助ノ内命ヲ承ケテ松下與膳四國十三藩ニ遊説ススヽト云ヘ氏、此亦板垣一人ノ発起ナリトノ意味ニハ受取レヌコトニテ、如此決シテ一参ノ政ヤ一参事ヤ又ハ或一人ノ発起デモナク、力デモナカリシ事ト思ハル。余ハ四國會議ハ当時ノ土佐藩ノ輿論ニヨツテ起ツタモノデアルト思フ。而シテ其輿論ハ土佐藩ノ先輩ノ先覚者ノ思想ノ流ヲウケタ人々ノ思想ノ大勢力デアルト思ウ。然ラバ其先覚者トハ如何ナル人カトスヘバ、坂本龍馬、長岡恂、後藤象二郎等等デアラウト答ヘル。

先ヅ坂本ト長岡後藤ナドノ議会ヲ立レテ政事ヲ議スベシトスルノ例証ヲ上ゲルト。第一ハ坂本龍馬ガ後藤象二郎ト共ニ慶應三年上京ノ際船中デ海援隊ノ文司長岡謙吉ニ草案セシメタトスル「新政府ノ八策」中ニ「上下議政所ノコトヲ書イテアル。もっとも之ハ世ニ伝ハル「維新八策」トハ全ク別ノモノデ現在ニハアッテモ其内ノ一ツノ如キ田舎浪士ノ脳ノ的調和中ノ八策ト称セラレ、モノ、其五ヶ条ニ掲ゲラレタ文字デアルッ又他ノ一ツノ八策中ニハ

一、上下議政局ヲ設ケ議員ヲ置キテ万機ヲ参賛セシメ万機宜シク公議ニ決スベキコト、トスフ一條ガアル。

第二ニモ亦全年九月長岡謙吉ニ草案セシメタト傳ヘラレル大政奉還ノ建白書中、山内容堂ノ家来、寺村左膳、後藤象二郎、福岡藤次、神山佐多衛ノ四人連署ノモノニ、

一、天下ノ大政ヲ議定スル会権ハ朝廷ニヨリ、則チ　皇國ノ制度法則一切万機京師議定所ヨリ出ヅベシ。

一、議政所上下ヲ分チ議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ルマデ公明純良ノ士ヲ撰挙スベシ。

トスッテ、上下両院ノ議會ヲ設ケ、議員ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ル迄身分階級ヲ論ゼズ、公明純良ノ士ヲ議事官ト称シテ今日ノ議員ニ撰挙セネバナラントト述ベテ居ル。又

一、議事ノ士大夫ハ私ヲ去リ、公平ニ基キ術策ヲ設ケズ正直ヲ旨トシ既往ノ是非曲直ヲ問ハズ、一新更始今後ノ事ヲ視ルヲ要ス、言論多ク實験少キノ通弊ヲ鑑ミザルベカラズ。

トスルヲ以テ議員ノ職責心得等ヲ細カニ述ベテ居ル。

第三ニモ上佐海援隊出版論ト称スル冊子ノ原書並ニ其英訳書アリト云ヘバ余之ヲ視ズ。英訳書ヲ出版シ邦訳シテ藩論トセント欲スル者ハ先ヅ国権ノ行施ハ輿論ノ讃同ニ依ルベシ輿論ノ讃同ハ公議ニ決スルニアリ。然レバ帝国ノ政治ニ通用セラルヽ憲法ハ帝国ノ人民ノ公議ニ依リテ制定セラルヽモノニシテ

各藩にも適用せられるものであるから各藩は改革を行ひて一般選挙ノ
法を立て代議員を選挙し、之によつて藩政を改革せねばならぬト云フ
意味ノ事ヲ論ジテ居ル。

藩論ノ著者ハ坂本龍馬デアルト云フ說モアルガ、各書ヲ見タ人ノ語ル所ニヨルト為無紀本ト同ジ事ガ
書イテアツテ、維新後ノ著述デアル。書イテアルコトモ坂本龍馬ナイ様ニ思ハレル。長岡前ノ著述デアルト吉田
正春氏ガ云ツテ居ルガ、ドウモ長岡氏ラシク思ハレル矣ガ多イ。要スルニ土佐藩援隊ノ先輩ノ著述デ確
目下如著者ノ名ハ分ラン。

第四ニハ土佐藩ノ福岡藤次ガ慶應三年十二月ニ朝廷ヘ「議事御建立
ノ御評議在ラセラレ度奉存候」トイフ建議ヲシタノデ政府ハ明治元年正
月ニ徵士、貢士ノ制ヲ定メ議政所ヲ創設スルコトニナツタト云フ事デ
アル。如此土佐ノ先覺者ガ夙ニ立憲思想ヲ抱キ議會開設ヲ首唱セルコ
トハ決シテ彼ノ後年民撰議院ノ設立建白運動ナドニ始マツタノデハ
ナイ。其淵源遠ク古ク、其運動モ亦維新前ヨリ始マツタモノデアルコ
ハ、以上ノ数ケノ實例ノ外ニモ、猶未幾ラモ有ラウト思フ。

以上ノ事實ニ徵シテモ四國會議ノ發起首唱ハ或一人ノ者デハナクテ
夙ニ立憲思想ヲ抱キ議會政治ノ必要ヲ痛感セル有力者ニ依テ生シタル
輿論デ有クデアラウ。後藤象二郎モ福岡藤次モ神岡佐多衛モ、本山只一
郎モ其一人デアツタデアラウ。板垣退助モ又其一人デアラウ。他ニモ家
人モ同志ガ有ツタ事デアラウ。
而シ全會議設置ノ議ハ何時カラ起ツタカ。土佐藩ガ奥羽征伐ヨリ凱旋
シテ、明治維新ノ聖旨ヲ奉體シテ軍備ノ擴張充實ヲ図リ、諸般ノ弊政改
革ヲ断行シ、進ンデ皇室ノ藩屏トシテ大ニ奉公ノ實績ヲアゲネバナラ
ン。夫レニハ先ヅ四國ノ十三藩ガ一致協同シテ治績ヲアゲ、互ニ援助シ
合ツテ外敵ニ当リ、一朝國家ニ事アル際ハ後顧ノ憂ナク中央ニ出デ
活働シ得ル様ニ平常カラ意思ノ疏通ヲ謀リ一致團結シ置ク必要ガア
ル。ソノ為メニ第一番ニ四國會議ヲ起スガヨイト云フ事デ、明治二年二
月土佐藩廳ハ小監察軍備係ノ松下輿膳綱武、小監察前野敬次郎
長順ニ四國ノ各藩ニツキテ誘說シ開議ノ事ヲ纏ムル様命ジタ。両使節ハ

金陵會議一名四國會議

（沼田賴輔氏ハ下横目曽我傳六氏ノ事ニツキ他ニ見聞セシコトナケレバ、唯參与ノ方ト附記ス）二月十六日高知ヲ發足シ伊豫ノ國宇和島藩ニ向ツク。發スルニ臨ミ參政板垣退助ハ使者松下與膳ニ問テ曰ク「此度ノ會議ハ最モ重大ナル事ニシテ容易ニ纏マラザルベシ。然ルニ四國ハ狹シト雖モ猶ホ十三藩アルヲ以テ議論百出容易ニ一体其方ハ幾日ニテ談ノマトマリ歸ヘテ曰リ「此所一ケ月ノ後迄ハ之ヲ纏メテ歸リ復命セントスルカ」ト與膳直ニ答ノ者之ヲ聞テ皆内心ニ擬笑セルヲ知ラズ。ニテ耳語セル者サヘ見受ケタレバ、何ニヨル只今ノ成ス所ヲ視給ヘトモ、ト云ツテ座ヲ起ツタ。

第四　土佐藩ノ誘説ニ十二藩讃同ス

松下与膳、前野敬次郎等ハ四國會議誘説ノ使者トナリ、明治二年二月十六日高知ヲ發シ、宇和島ニ着シ、今十八日今治藩ノ目附役、山下清記、河原治左衛門、參政田辺太一、大夫檜垣彌三郎ノ諸士ニ面會シ會議開催ノ趣旨ヲ述ベテ同意ヲ求ム。今十九日檜垣彌三郎ハ今藩主ノ命ヲ受ケテ來リ、開議ニ賛同ノ旨ヲ返答アリケレバ、松下等ハ宇和島ヲ發シ、今廿日吉田ニ到リ吉田藩ノ今意ヲ得テ、今廿一日大洲藩ノ參政山本嘉平陣新兒、武田亀五郎、谷右エ門七ノ諸士ニ面會シテ勧誘シ亦ニ議論ノ戦ハシタル結果、今藩モ亦同意ヲ表セルヲ以テ、翌廿二日午后四時過新谷ニ着シ、今夜松下等ノ旅宿ヘ訪來レルヲ以テ、今藩ノ町代宮矢野淳作（松下与膳ノ自叙傳中ニ矢野淳藏ト記セリ何レカ正ト）、町支配増田連、宮脇平十郎等ト會議ノ件ヲ委細談話シ置キ廿三日更ニ書生碧川眞澄、笹田大次郎今席ニテ面會シ今藩訪問ノ旨意ヲ述ベテ勧説シ、直ニ今藩ノ同意ヲ得、今廿四日東權之丞ニ面會シテ來意ヲ述ベ誘説ノ賛成ヲ求メシニ、東權之丞ノ両人松下等ノ旅宿ヲ訪來リテ松山藩今意白河笹右衛門、河東權之丞ノ両人松下等ノ旅宿ヲ訪來リテ松山藩今意ノ旨返答ニ及ビケレバ、今廿七日行イテ午后二時今治ニ到着シ直ニ參政富島格ニ面會シテ會議開催ノ事ヲ誘説セルニ、今藩ハ其翌廿八日當

島格ヲ以テ全意ノ旨返答ヲ得、依テ小松ニ向フ。廿九日、小松ノ旅宿ニ於テ全藩ノ青山操ニ来意ヲ告ゲ次デ全藩ノ陣屋ヲ訪ヒ参政一柳權助、田村九大夫、黒田左之助、黒川知太郎、服部餓太郎ノ諸士ニ面會シテ誘説ノ結果、早速全藩モ賛成セル故、全日馳セテ西條陣ニ到リ、翌三十日全藩ノ參政伊藤隼太、鷲見勝八郎ノ両士来宿シテ全藩ノ全意ヲ表セルニヨリ、翌三月朔日西條ヲ発シテ二日丸亀ニ着シ、全三日丸亀藩ノ執政土岐權之丞、土肥大作ノ両士ニ面會シテ誘説セシニ丸亀モ其支藩多度津両藩ノ同意ヲ表セラレケレバ、全五日ハ高松ノ旅宿ニテ高松藩ノ町奉行筧又蔵參政小泉仲、佐久間隆蔵山本新平等ニ面談誘説ス。全六日在小泉仲山本新平ノ両人ヨリ同意ノ旨返答アリ全九日往テ徳島ニ着シ、吉積禄太郎奏者役足助衛人、寺面金右衛門ナドニ面會シテ誘説ス。全十日新居與市公用人武居列（松下ノ日誌、烈ト記セリ如何ナル）ノ両士ニ面會シ誘説シテ全藩ノ同意ヲ得。是ニ於テ誘説ヲ了リ、全十一日徳島ヲ発シテ兵庫ニ午食、甲浦ヲ経テ全月十四日高知藩ニ帰着、四國十二藩悉ク我首唱ニ賛同セルト日ヲ復命ス。松下等ガ使命ヲ帯ビテ高知ヲ発足セシヨリ茲ニ至ルマデ実ニ日数廿九日ニシテ、豫テ松下ガ板垣參政ニ約セシヨリモ二日早ク、使命ヲ全ウセルハ參政一同其勤労ヲ賞ス。松下等ハ大ニ面目ヲ施シテ退ケリトイフ。

（松下与膳手記誘説日誌ナル松下ノ自叙傳ナリ）

宇和島藩ハ三月上旬ニ土佐藩ヘ監察不破忠次郎ガ藤堂一郎（備前ノ）ノ後ニ自棄ト称スル川名謙藏ノ三人ヲ使ハシ、当時宇和島藩公ハ函館追討ノ際出兵スル能ハザリシ事ニヨリ謹慎ヲ命ゼラレ居ル際ニ付右謹慎相解クル迄ハ公議人モ會議ヘ出席致サセ難キモ、謹慎明ケノ上ハ取急ギ出席致サセル旨ヲ以テ左林悪右衛門ヲ挨拶ヲナサシメタリ。

第五　四國會議建置ノ趣意。

（四国各藩史料ヲ藩日誌等ニ依リ會議建置ノ趣意ヲ述ベ、尚ホ高知藩誌ニハ「建置會議會談ヨリ」ニ依リ一名四國會議ト称スル事ヲ記セリ）

上佐藩ハ明治二年二月ヨリ三月ニカケ四國列藩ノ同意ヲ求メ四國會議ヲ起スコトトナリシガ、更ニ公ト天下ノ公論ヲ興スノ趣意書ト第一回會議ノ日時トヲ記シ、且ツ書翰ヲ各藩ニ送達セシアル。

建置金陵會議

憲ヒ内ニ在レバ守リ各藩ニ在リテハ可也、國ニ在リ、今也外國ノ勢日ニ偪リ是大患外ニ在リ、然レバ六十州一家ノ公ニ就キ左右手ノ相救ケ如キヲザルヘカラス、夫レ身藩屏ノ職ニ居リ、列聖ノ鴻澤ニ浴シナガラ大患前ニ在リ國歩多難而メ各藩相顧テヲ袖ニシ嘗テ決然力ヲ王事ニ致ス能ハスンバ其レ藩屏ノ職ヲ如何ンセン、コレヲ要スル

ニ各藩豈異心アランヤ、其蟐相疑慮スルニアルノミ、其レ奮然身ヲ以天下ニ先タツ能ハサル所ナリ、然ルユエンノモノハ蓋各藩ノ國情相通セサレバナリ、故ニ徹邑ノ意一ノ會議所ヲ設ケ、カノ外内ノ利害彼此ノ得失及都鄙上下ノ情狀悉クソノ詳ヲ此ニ得シコトヲ欲スルノミ、夫レ事アレバ必相圖リ動靜必相通知シ然後ニ協恊戮力内ハ以テ天朝ニ奉スベク、外ハ以外患ヲ防クヘシ顧フニ四隣ノ境ヲ接スルヤ、其相違ル近者ハ二三十數里遠者ハ二三十里尋常使人往來ノ能ク盡スベキニ非ズ是徹邑ノ會議所ヲ設クルユエンノ意ナリ、然ニ聞者或ハ曰ン　天朝ノ令諸侯私ニ盟誓ヲ立ルヲ得ズ、會議所ノ設ケ、ソノ嫌ヒナキヲ得シヤト、是大ニ然ラズ、何トナレバ是會議ナリ盟誓ニ非ルナリ、即今上國三藩會議或ハ四國會ト稱スル如キ亦是レナリ、抑間言ハ入リ易ク人ノ言モ亦恐ルベシ、故ニ徹邑謀メコレヲ以テ輔相ノ閣下ニ達セリ、則世ノ人言モマタ畏ルヘキナシ、ソレ六十州一家トナリ全國相維持スルハ徹邑ノ願ヒ也而メソノ能スヘキニ

非ス。今且四國一家信義凛然凡ソ事皆至公ニ出テ彼此情ヲ通シ内外ノ変ニ應セシニハ他日近ヨリ遠ニ及フ亦此ニアラシカ只冀クハ同志ノ君子コノ意ヲ諒センコトヲ。

諸藩へ啓書

一筆幷啓愈御健全御奉職奉謹賀候然ハ敝邑宿望之筋有之此程両生諸御藩江差出候處惣而御別慮無御座趣於敝邑本懐不過之矣附而ハ右會議之地圓亀ニテ可然ト御衆議モ矣間何卒来ル四月十日ヲ期限トシ彼表ニ相會シ其上ニテ尚又向来之所御示談仕度奉存此段御通達仕矣　恐惶謹言

三月廿三日

片岡　健吉
高屋友右衛門
林　勝兵衛
本山　只一郎
谷　守部

宇和島御藩

御重役中様

右ト仝文ニテ大洲、新谷、松山、今治、小松、高松、阿州ノ各藩重役中宛ノ書翰ヲ出シ、特ニ丸亀藩ヘハ下記ノ如キ別書ヲ贈ツテ居ル。尤モ以上ノ八藩ヘ〃書翰ニハ各宛名〃下ヘ左ノ如キ追申ガ認メラレテ居ル、此モ参考ニ記シテ置カウ。

再啓右會議所ニ付別段議事堂ノ如ク新局相設候様萬一御聞取御座候而者甚背本意矣全ク左様ニテハ無之寺院若クハ市宅孰レナリ凡可然閑処有之矣ヘバ一藩ヨリ二人或ハ三人探索ノ姿ニテ時々相會シ諸事御示談為仕度追々東京御會議等モ候ヘバ報知行違或ハ種々ノ浮説流言蜂起可仕旁以各藩探知之侭彼此會通仕矣ヘバ事情之真偽得失明白ニ相辨シ御互ニ心得之筋ニモ可相成奉存矣此程差出候者共若シ如何之申違有之モ難計為念此義申出矣尚敝邑意趣大略別紙之通ニ矣間御諒察可被下候　以上、

金陵會議一名四國會議

且御支藩ヘハ別段御掛合未相成候間右之趣御申通被下度御頼申
進候。　已上

丸亀藩江掛合

一筆拝啓愈御健全御奉職奉謹賀候然ハ敝邑宿望之筋有之此程両生
御藩江差出矣処惣而御別慮無御座趣於敝邑本懐不過之候附而ハ右
會議之土地未ダ取極メニハ不相成候得凡此度ノ一會ニ於テハ尊藩
又ハ松山表等ノ内ニテ可然哉ノ衆議等モ御座候趣ニ付不遠慮之至
ニハ候得共格段御故障ノ筋等無御座矣ヘバ来ル四月十日ヲ期限ト
シ尊藩江相會シ向来之所篤ト御示談ヲモ仕申度依テハ御報不相待
諸御藩ヘモ大旨前書ノ振合ヲ以掛合ニモ相及可申ニ付左様御承知
被下度勿論會議所之儀極手軽ノ事ニイタシ追々ハ夫形ノ規則ヲモ
相立可申ニ付決而御配慮被成下間敷候右為可得御意如此御座候

恐惶謹言

三月廿三日

片岡健吉
高屋友右衛門
林勝兵衛
本山只一郎
谷守部

丸亀御藩
御重役中様

此ニモ再啓云々ト追申ガ附テ居ル、ソレハ前記各藩ヘノモノト仝様ニ
支藩（多度津）ヘノ掛合依頼ト其他會堂ヒ議員数並ニ建置趣意書等ノコ
トヲ書テ居ル。
以上拾通ノ文書ハ何レモ時ヲ送ヲ以テ各藩廳ヘ達シテ居ル。
此度御隣領諸藩重役之面々江別紙十通急速差立矣間向藩郡代発時分
送ヒ以相違矣様御取計被成度如斯御座矣　以上

高屋友右衛門

金陵會議名四國會議

山田駿馬様
中山左衛士様
浅利繁左衛門様

右ノ趣意書ヤ書翰ノ文面ニヨツテ考ヘルト当時京都ニ三藩会議トイフ会議ト四國會トイフモノガアツタコトヤ、此度開催ノ四國會議ハ既ニ土佐藩カラ政府ノ大官ヲ通ジテ朝廷ノ御諒解ヲ得テ居ツタコトト思ハレル。而シテ本會議ヲ起セシ目的モヨリ明燎シテ居ル。即チ各藩ハ内外ノ利害、都鄙上下ノ情状ヲ之ノ會ニヨツテ詳知シ、以テ当時ノ世態ヤヤモスレバ流言浮語蜂起ノ恐レアリ、万一之等ノコトアルモ各其ノ眞相ヲ捉ヘテ能ク善處シ、事アレバ相聞シ、議アレバ相議リ、動静必ズ相通知シテ割據ノ余習ヲ除キ、以テ内ハ天朝ヲ奉ジ外ハ外患ヲ防イデ藩屏ノ職責ヲ全フセントスルニアルト云ツテ居ル。

参考。三藩会議ハ薩長土ノ三藩会議カ、上國ニ於ケル四國會トハ京都ニテ明治元年カラ二年頃マデナ三藩ノ京都詰ノ役人ニヨツテ組織セラレテ居ツタ會ラシク、之ハ二年以後ニモ継續セラレテ居タ[illegible]シ、此會ニ就テハ十分ノ調査ヲナシ居ラズ。今左ニ徳島旧藩士根本熊次郎公翁(昭和七年ニ九十一歳)ガ田所眉東氏ニ語リタル四國會ニ関スル事ヲ摘録スルト。

明治元年ノ九月カ十月ノ頃ト思フ、当時各藩ノ志士ハ中央ニ熱走スル者ハ上下共ニ其歩調ヲ等シウセナケレバ萬全ノ績ハ挙ガラヌ、他ハ兎ニ角四国ノ諸藩丈ケデモ統一シテ上下ノ連絡ヲ採リ遠イ國許ノ志士ニソノ様ヲ逸セシメルコトノナイ様ニトテ京都ニ於テ四国諸藩ノ會合ガ出来タ、之レガ即チ四國會デアル。翁モ留守居役ノ関係デ出席シタ其會合ハ一ケ年ニ二三回位デアツタ。

明治天皇ハ江戸ヘ行幸遊バサレタ其十二月ニ京都ヘ還幸更ニ翌二年四月東京ヘ御遷リ遊バサレタ。之ガ為メニ京都ハ直接其関係ガ薄クナツタノデ志士ハ申合セテ四國ノ中央ナル讃州琴平ヲ以テ其集合地ニアテタ之レヨリ金陵會議ノ称ガ起ツタモノデアラウ。其名称ハ四國會議トイフモ他藩ノ志士モ之ニ加ハツタ翁ハ

金陵會議ノ名四國會議

周防國山口ノ人モ来リ居タコトヲ知ツテ居ルト云ハレタ。
根本ノ話ニヨリ京都ノ四國會ノコトハ能ク分ツタガ（金陵會）四國會ガ京都ノソレトハ同一デナイコトト、四國以外ノ藩ガ正會員デナカツタコトハ余ノ既ニ記スル所デモ明デアル。他藩人ノ多ク入リ来レルコトハ猶ホ後ニ記ソウ。

香川縣史第一篇ニ此會ヲ四州會ト云ツテ居ル、即
是年（明治二年）高知藩ノ首唱ヲ以テ四國列藩ノ士ヲ琴平ニ會シ國家有事ニ際セハ各藩ノ團結方向ヲ一ニシテ以テ公議ヲ盡シ、平時ニ在テハ互ニ文武ノ學生ヲ巡游セシメ專ラ親睦ヲ謀ラントス之ヲ四州會ト称ス、翌年ニ至テ此會ヲ廃ストアル。実ニ簡ニシテ要ヲ得テ居ル。又篠崎甲子次郎氏ハ（元琴平町ノ出身ニテ之ノ會ニツキ幼時見聞セル事ヲヨク記憶セラル）四國會ノ目的ハ
各藩中勤王佐幕ノ党互ニ相軋轢紛爭ヲ釀セシガ今ヤ　天皇万機ヲ御親裁アリ、領土モ亦皇室ニ返上セラレシ今日畴昔ノ如キ争鬪ノ要ナキヲ以テ將来ハ益々我ガ四州十三藩ハ互ニ團結ヲ固クシテ和衷協同以テ四州治安ヲ鞏固ニシ福祉ヲ増進セントスルノ由ニ聞ク、蓋シ要ハ從来ノ感情打破ニアリ凶ト云ツテ居ル。

又大洲藩史料ニ（ヨリ足達儀國氏ノ冠シ贈ラレシ処ニヨルト四國會）次ノ如ク書カレテ居ル。
四國會開設。抑四國會ノ発起ハ高知藩士板垣退助首唱スル所ニシテ畢竟藩論ヲ各藩ニ及ホシ專ラ親睦ヲ結ヒ論旨ヲ一定セントスルニアリ。明治二年春月日不詳讃州琴陵ニ會議ヲ開キ四國十三藩各二名ノ代議士ヲ出張セシム、大洲藩ヨリ武田亀五郎、西谷正道出張ス該會タルヤ四國ヨリ九州漸次全国共主義ヲ一ニシ我皇國之本體ヲ守テ確乎不可易ノ（中国）地ニ至ルヿヲ期スルニアリ、然ル所翌明治三年十月一先議會閉鎖シテ各帰藩ノ事トナル然レ氏時アツテ集會之催有之筈ナリ。

以上何レモ参考トスベキ所多キ故茲ニ掲ゲタガ最後ニ記セル、○○点
金陵會議一名四國會議

ノアル所ハ後章ニ詳述スル事トシ
却説テ四國會議ノ趣旨目的ハ前掲ノ
議ハ裏面ニ猶ホ深キ意義ヲ持ツテ居タ様デアルソレハ故谷干城子、即
此当時ノ谷守部ノ隈山賠謀録ニ
先達御國論ナル主意ヲ發表シ、先ツ四國ノ諸藩ヲ連説シ四國會ナル
者ヲ琴平ニ起シ四国ノ諸藩ヨリ公議人ヲ出シ至ニ親睦ヲ結ビ共ニ
各地ノ情況ヲ通報シ緩急相援クルノ制ヲ定メシ發議者ノ主意ハ全
ク一種ノ企望アリ、窃ニ謀ルニ天下ノ事朝令暮改人心ホゞ服セズ、
朝政ハ浮浪徒ノ占ムル所トナリ動モスレバ常ナシ、其ノ綜不遠又乱ル、ハ
避ク可カラズ此ノ時ニ当テ薩長ハ必ズ両立セズ、相爭ハ必然トナリ、我
土佐若シ長曾我部ノ轍ニ做ヒ四国ニ兵ヲ用ヒハ假令勝算アルモ天
下ノ時機ニ後レ四國ヲ一歩モ出ツル能ハズ是レ愚ノ至リナリ、仍テ
此ノ會ヲ設ケ一致シテ親睦シ事アルニ当テハ土佐ハ後顧ノ憂ナキ
ヲ以数艘ノ汽船ヲ以全国ノ兵ヲ挙ゲ直ニ攝海ニ入リ錦旗ヲ擁シ、

王室ヲ保護セバ東北不平ノ藩ハ固ヨリ為ス所ナク、
ト、此レ意中ニ含ム所ノ大主意トナリ
ヲ共ニシ難キ事情アレバ事宜ニ
レバ薩ノ情況ヲ応視ヒ目的ヲ結ビ
ノコトハ起リタリ十二月廿三日御
安國丸ト称スル御座船ニ被召浦戸
ニ其夜幾崎邸ニ御一泊翌日御発
賀船(天名ノテレス)ニ被召即刻御出帆翌廿六日夕薩州鹿兒嶋港外ニ御
着船ナリ。
又仝ク谷干城遺稿上巻(附錄第六)廃藩改革第十八ヶ條ノ記事ニモ
当時相議シテ曰ク他日ノ挙乱ハ必ズ薩長ノ軋轢ニヨル此時ニ際シ
我藩ハ孰レヲ助クル欤、長州ハ固ヨリ姻戚ナリシモ近時ノ御縁組ハ
破鏡ト成リ両家互ニ面白カラズ、薩州ハ智鏡院様ノ御里ニシテ三部
公ハ智鏡院様御愛第ニシテ忠義公ハ御姉ナリ、且ツ慶応三年六月以

金門會盟ノ旧慣ヲ語
来西郷、小松、吉井ノ諸氏ニハ深キ縁故モアレバ薩ト事ヲ共ニスルヲ好シトス。万一上國ニ変アレバ我カ矢ノ如ク兵船ニ満載シテ直ケニ京師ニ入リ主上ヲ守護シ奉ル是上策ナリ。若シ長州ノ如ク四国中ニテ戦争ヲ始ムル時ハ日月ヲ徒費シテ上國ノ事ニ後クルレバ薩邦ト事ヲ構フルハ拙策ナリ然レドモ國中ノ兵ヲ挙ケ皆上京セハ薩邦或ハ虚ニ乗スルノ恐レ無シトモ難計今ニシテ隣邦ノ同盟ヲ謀リ親睦ヲ結ブニ如カズ於是テ隣邦十二藩遊説シテ有事ノ際同盟ヲ誘ク《芸和島、吉田、大洲、新谷、松山、西條、今治、小松、多土津、丸亀、高松、徳島》説レモ喜テ同意ヲ表セリ、独リ徳島ハ四國中ノ大藩ナレバ我藩ノ催ニハ快カラサルガ如キモ里議ヲ設ケ十二藩ヨリ各一両人ヲ出シ至ニ總親ヲ結ト各地ノ出来事ヲ通報スル事トセリ、此ヲ四國會ト名ク是我カ藩ガ後顧ノ憂ナク國ヲ擧テ四國ノ連合ハ已ニ出来タレバ薩ト雖モ我カ藩ヲ軽シテ上京スルノ策ナリト、斯クテ四國ノ親ヲ結ブノ必要アリ即チ明治三年二月下旬豊範公自ラ薩公御訪問ノコトニ決シ、二月廿五日四ツ時紀伊國屋《元名ノテレス》ニテ御出発翌日夕薩州鹿児島港ニ御着、廿七日天神馬場築屋御殿ヘ御移転薩公御未訪御対面、廿八日薩公ヲ御訪問ヨリ廿九日正午薩公再ヒ御来談其夕首尾能ク御帰館ナリトアル。

彼此相照合シテ、以下全貌ヲ左ニ掲ゲベキデアル。

第六、第一回ノ四國會議《九亀會議》

明治二年四月十日第一回ノ四國會議ヲ讃州丸亀ニ於テ開ク、之ヲ丸亀會議トモ称ス、高知藩重役高屋左兵衛司會者トナリ、今後事務協議セルモノ、如シ。此會議ハ諸藩共詳細明確ナル記録ノ存セルモノナク、為メニ琴陵会議ハ即チ四國会議ナリ、丸亀ナドノコトハ知ラヌト云フモノアレド、惜ニ此度ニ開會セル記録ハ存ス。唯詳細ヲ知ル由ナキハ遺憾デアル。今諸藩史料、諸家文書等ニヨリ考察スルニ大体左ノ如キ事ヲ議シ或ハ決議実行セル様デアル。

一、皇上ヲ奉戴シ朝廷ヲ擁護シテ

金陵會議ノ名四國會議

一、會議所ヲ琴平ニ移シ全地ニ常置スルコト

一、各藩ヨリ公議人ヲ撰出シ之ヲ琴平ニ駐在セシムルコト、

一、公議人ハ各本藩ト京都東京トノ間ノ連絡ヲトリ探索報道等議事等ヲナスベキコト、

一、毎年春秋二回（四月ト十月又ハ九月）各藩重役出席シテ大會日ヲ開クコト、

一、通常會議ハ毎月十ノ日ニ行フコト（十日廿日三十日ノ三日）（五頃宇野氏報）

一、公議人ノ撰定ハ格式ニカヽハラズ人材ヲ登用スベキコト。

尤モ至誠憂國ノ士タルベキコト、等

九亀會議ニ參集セル各藩ノ議員ハ左ノ通デアル（纏リタル記録ナキヲ以テ遺漏ナキヲ保シ難キモ改訂肥後藩國事史料ノ一新録探索報告ニヨリ左ノ人名ヲ録ス）

德島藩　橋本桝之助　森信衛

高知藩　高屋左兵衛　小森守太郎

高松藩　竹井守衛　菊池新三郎

松山藩　河原権之進　野中守門

大洲藩　武田榮五郎　林　胖助

西條藩　鷲見勝八郎　永田靜之助

今治藩　高濱佐七郎　（今一人を欠）

丸亀藩　木村正一郎　浅見勇助（当時在京近日引取候筈）

多度津藩　野間傳三　河口伊助

新谷藩　寺井七兵衛

小松藩　黒川武夫　（今一人を欠）

宇和島藩　田手次太夫

吉田藩　今村隼之進　高橋清蔵

以上デ此人名ノ見出ニハ琴陵集会所ニ出方之姓名トシ。仕舞ニ己巳五月淀舟蓬窓下ニ而高橋清蔵ヨリ承候已トアル。肥後藩ノ探索人ガ吉田藩ノ高橋清蔵ト淀舟ニ同乗シテ、四月ニ四國会ヘ出席シタ人々ノ名前

金陵會議ノ名四國會議

ヲ聞取リ報告シタモノデアル。

大洲藩史料中ニ丸亀藩ノ浅見氏ノ名ハ勇馬ト、徒岳ノ橋本氏ノ名ヲ虎之助ト、大洲ノ武田氏ハ名ヲ亀五郎ト記シテアル。何レガ正、ヒガ猶ホ調ブベキデアル。又土佐藩ノ出方姓名ハ高屋、小森ノ外ニ宮地彦三郎（当時土佐御預所頭取ニテ讃州ニ在勤、当時八木彦三郎ト称ス）横山匠作（大隊司令）松下与膳（当時小監察。横山、松下ハ高屋ノ随員）ガ出席シタ。

又西條藩モ鷲見、永田ノ外ニ長谷川与市モ出席シタラシイ。宇和島ハ田手ノ外ニ上原郷助、山下清ガ同伴出席シタルモ、三人共此會ニハ幾日カ遅レテ出席シテ居ル様デアル。

参考、松下鳳兮四國會議（出席ノ扣書及松下与膳自叙傳中ノ記事ニヨレバ、明治二年四月四日大監察高屋左兵衛、大隊司令横山匠作、小森守太郎、小監察軍係松下与膳等今回開催ノ四國各藩聯盟ノ丸亀会議ヘ出席ノ為メ高知ヲ出発ス。（松下ハ丸亀会議用係ヲ余ゼラルト記セリ）仝八日丸亀ニ着ス。仝九日西條藩鷲見勝八郎、長谷川與市両人丸亀ニ参ノ着、土

佐藩出張役人ノ旅宿ヲ訪フ、次デ四國各藩議員丸亀ニ参集ス。宇和島藩ハ〇〇〇ニテ使節不参ノ旨公輸、四月九日丸亀ノ土佐藩吏許ニ着ス、十日第一議會開催是レ実ニ四國会議ノ発端也、次デ金比羅ニ會議所ヲ開キ即チ還ル」トアリテ、此會議日数ガ不**明**デアル。又金比羅会議所ヲ開キ即チ還ル。大ニ不明瞭ナ点ガアル。右文中ノ〇〇〇ハ謹慎中ノ三字ノ意デアラウ。

松山市西園寺源透氏報告中ニ当時宇和島藩公函館出兵不能ノ為メ謹慎ヲ余ゼラル居タルニ付其謹慎ガ解ケル迄出席ガ出来ス（即四月十日ニ遅レテ出席スル）由、金藩カラ吉田藩ト高知藩ヘ挨拶ノ使者ヲ出シ又ハ照会シタル記事アリテ、田手次太夫ト遅参ナレコトヲ**分**カル。

猶宇和島藩史料ニヨルト金藩ノ鈴木震吉、須藤但馬、河原治右エ門（後吉森桑圃ト改ム）土居兵衛ナ[illegible]出張命令[illegible]賞際会議ニ出席セ[illegible]ルヤ否ヤガ不明ニアル。

丸亀ニ此會議ヲ開イタ理由ト之ヲ[illegible]移シタ理由ハ明デナイ。

金陵會日誌（四區會日誌）

余ノ察スル所ニヨレハ、此地ハ当時之ヲ通ノ要地ニ非ラス、且ツ此地ニ明治元年カラ土佐ノ海援隊ガ護衛ノ為メ本陣ヲ此地ニ置キ長岡謙吉（後ノ参謀）や八木彦三郎（宮地彦三郎）等モ居リ又此地ニハ土佐藩ノ定番ヤ御用商人等モアリ、且ツ此地ハ維新ノ際土佐ト行動ヲ同ジクシ土肥兄弟、田岡小輔ガ終リテ知己ノ士ナレハ万事ニ知オヤノ相談ヲ為ス為メ勿論便宜ノ多カル可キ事ハ言ヲ俟タズ。又琴平ノ地ハ古来金毘羅大権現ノ領地ニテ全ク俗界ノ外ニ在リ、今又土佐藩ノ御預リ所トナリテハ本陣モアリ、土佐ノ矢張モ居レハ諸般ノ事務ヲ執ルニ最モ便利ナル場所ナルヲ以テ会議ハ此地ニ開クヘキ事ニ決シタリ。

唱者トシテ司会上ニモ実ニ便利デアル。特ニ此地ハ全国カラ金毘羅宮ヘ参詣ガ集マリ来リテ殷賑ヲ極メル所デアルカラ時情ヲ知ルニモ亦大ニ便利デアリタカラ此地ニ決シタノデアラウト思フ。

参考、徳島根本熊次郎翁ノ話ニ「琴平ハ天領地ニテ天下志士ノ集合ニ好適地デアッタノデアリ維新前後ニハ薩長ノ勤王志士ヤ阿加ノ森寛斎

トドモ此所ニ三度ビ隠レテ居タコトガアリ、美馬君田モ琴平ニ居タ故万事ニ都合ガヨク便利ダカラ金陵会議モ此処ニ開カレタデアラウト思フ。

第七　琴陵會議

四國會議ハ先ツ毎年琴平ニ移リツヽアリシガ廃止ニナルニ及ンデ琴平ニアッタ丈レ故琴陵会（金陵ノ字ヲ用ユ）又ハ琴陵会議ト称セラルヽ筈モ琴陵会議ト称シテ居ルノデアルノ如テ琴平ニ於ケル琴陵会議ノ何時カラ何時迄カレタカト云フト、未ダ其初期ノ事ガ不分明デアルガ公議人ノ例會日ハ明治二年十月頃迄ハ毎月十ノ日、廿日、廿九日ノ三日デソレ以後、仝三年六月迄ハ毎月五ノ日、十ノ日、廿ノ日ノ三日ニ定メノ会日ノ外ニ臨時会議ヲ開キ、又ハ不明デアルガ、六日、仝六月以後ハ三、五、八、十ノ日即チ五、十五、二十、廿五日ホノ五、廿八、廿日ノ十二日トイフ風ニ會議日数ガ段々ト増加シテ来タ併シ仝三年九月以後ハ不明デアルガ、以上定メノ会日差閊ガアレバ協議ノ上デ会日ノ繰下ゲ繰上ゲヲナシ、又ハ流會トスル事モアッタ。

會場ハ主ニ土佐ノ本陣即土佐ノ旅宿トセル森屋喜太郎ノ如家デ御

ニハ寺院ヲ借受ケ、他藩ノ旅宿デ開クコトモアツタ。

公議人ハ周旋方トモ云タガ探索係デ出来テ居ツモノモアル、出方役人トモ書イテアル。各藩カラ二三人ヲ派シ、若党ヤ小者ヲ召連レテ居ルモノモアリ、長ク出張シテ居ル者ハ家ヲ借リテ家族連ノ者モアツタ。今治藩ノ玉井八弥ノ如キ其一人デアル。公議人ノ外ニ書生ヲ別ニオコシテ居ル所モアツタ。

公議人ハ毎會々議ニ列シテ事アレバ議シ、或ハ他藩ノ動靜ヲ探リ、或ハ本藩トノ連絡ヲトリ、時務ヲ研究調査シ、列藩トノ親睦ヲハカル等相当多方面ニ活動シテ居タラシイ。

幹事、一般ノ事務ハ幹事ヲ定メテ之ニ当ラシメタ、其制月ニ二藩又ハ三藩ガ幹事ニナリ毎月順番ニ廻ハシテ行ク、故ニ月幹トモ云ツタ。重要ナ事ハ帳簿ニ記シテ月末ニ次番ヘ引継グ例デ。他藩ノ使者ヤ探索浮浪ノ士ニ応接シタリ、会議ニカケル事件ヤ懇會ノ周旋等マデ世ヲ燒イタ。

記録ニヨルト明治三年二月ハ土佐（他藩不明）、三月ハ不明、四月ハ大洲阿波、西條、五月ハ松山、丸亀、六月ハ高松、吉田、多度津、七月ハ小松、大洲、阿波ガ月幹デアツタ。

重役出席ノ大會　今明ニ記録ノ残レルハ四回デ、第一回前掲ノ丸亀會議デ明治二年四月十日日数不明。第二回（琴陵ノ初大會、明治二年十月六日ヨリ廿一二日頃迄約十六七日間。第三回（琴陵ノ第二回）ハ仝三年四月十九日ヨリ二十二日マデ四日間。但シ此時ハ土佐ノ重役ノ出張七八日間モ遅延セシ故各藩ヘ土佐ノ出張役人ガ挨拶ヲシタ。第四回ハ（琴陵ニ於ケル第三大會）仝三年九月十七日ヨリ廿三日頃、尽ク約六七日間デアツタ。

参考、庄岡健吉日誌抄ハ、明治三年九月金陵会所ヘ被差立、仝十七日金陵着、仝廿四日金陵出発、仝廿七日高知ニ帰着

第四回大会ノ事ハ会志市池上文書、金陵日誌等参考トナル。

會場　大會ノ會場ハ土佐藩本陣ヤ寺院ノ大廣間、書院等デアツタ。

…ノ名ヲ明治二年十月ノ會場ハ金陵日誌ニ於役所會議トアリ後所部本陣ト。
沼田類輔氏モ明治維新史ノ研究ヂ(三年ヵ)六日備前代表伯三十名ハ當時設置サレタ山内會議所ニ集會日ニテキタトアル。當時土佐ハ森屋ノ家ヲ借リ本陣ニ使用シ之ヲ會場ニ用ヒテ居タ。當時設置ニナッタノデアル。
寺院ヲ會場トセレコトハ川西條ノ高橋寿三郎氏宛出町錦田鄉土博物館主事岡田唯吉氏ノ書翰ニ「金陵會後ノ會場ハ金比羅宮書院ヲ借受ケタリト聞ケモ全社務所ニハ此ニ関スル何等ノ記録ナシ」ト
(2)金陵日誌 明治二年十月七日 各藩重役出席、例ノ寺ニテ開ク
(3)今治市史上卷氏宛番川孫史蹟調査委員岡田陸吉氏ノ回答ニ明治三年九月ノ大会議所ハ金比羅宮書院ヲ借用セル由記載メアリ。
(4)篠崎甲次郎氏ノ西川原次郎氏ヘ回答ニハ會議所ハ金毘羅宮金光院千田智敬ヲ先ヲ(権)シテ聞クトアリ。
以上ハ當時琴平宮ト金光院トハ別レ居リラモ此迄神仏混淆ニテ金毘羅大現ハ金光院ノ奏ル所ニテ茲ニ金毘羅トイフモ金光院ノ書院ノコトナルベシ

高知藩本陣

ハ明治二年十二月廿四日ニトウクト土佐ガ森屋カラ三百五十両デ四国上ゲタ。森屋ハ其後モ此ノ本陣ニ隣接セル從来ノ旅宿ヲ経営シテ居ッタ。土佐ノ役人モ此ノ森屋ニ滞在シテ居タ。
大。。。ノ出席ノ重役ハ各藩一名乃至三名位デ土佐藩ハ乾退助、後藤象二郎、板垣退助(何レモ欠席)、左兵衛、第二回琴平会見ハ渡辺弥久馬、本山只一郎、乾作七、第三回ノ大会ニハ深尾丹吉郎。第四回ノ大会ニハ片岡健吉ガ出席シタ。
其他諸藩ヨリ出席ノ重役ト思ハレル人ハ左記ノ如クデアル。併シ出席大会ノ前後月日等ハ詳カデナイ。

宇和島藩 田中次太夫
吉田藩 飯淵鐘(守井淵修盛(飯淵貞幹)
小松藩 馬川知太郎 出席主計(武保加守泰)、主内山操、
大洲藩 大橋直之 吉田泰長(山内)
松山藩 久松定謨(久松勢州)、銭木重遠、野中宇門(野中久徴)河原権之進
新谷藩 寺井七兵衛

今治藩　竹元平之進　富島格　太田五郎　池上邦五郎
西條藩　徳永三四右ヱ門　鷲見勝八郎
多度津藩　畑平學　河野胖助
丸亀藩　大口権之丞　土肥大作（土居大作ト仝人）　大塚八郎右ヱ門
高松藩　菊池新三郎　竹中守衛
徳島藩　新居與一助　武居列　橋本佈之助（武居列ハ或ハ武屋列）
猶此外前掲、後出人名中ニモ重役ノ出席アリシコトト思ハルルモ不明デアル。上記括孤中ノ氏名ハ上記ト仝人ノ疑アルヲ以テカクセルモノデアル。
一般公議人ノ氏名ハ十分ニ判明シ居ラザルモ諸方ヨリ集メ合セタルモノヲ左ニ掲ゲテ大方ノ示教ヲ乞ハントスルモノデアル、尤モ此ノ内ニ重役モ交ザリ、或ハ他藩ノ士ガ混ジ込ンデ居ルヤモ知レナイカラ、此矣ハ特ニ断リ置ク。
高知藩　八木彦三郎（宮地庫吉、仝藏吉、仝彦三郎ト仝人）。中村観一郎（中村観一、仝貫一郎、仝貫一ト仝人）桑原平八、川原塚茂太郎、島村祐四郎、桑原譲、島村壽郎、田岡小父、森脇唯次郎等デアル。此等ノ人々ハ何レモ維新ノ勤王家デ両島村氏ハ贈位ノ恩典ニ浴シテ居ル。
宇和島藩　山下清記　土居瀬兵衛（以上大洲藩史料ニヨリ足達氏報）（鈴木震吉、河原治左ヱ門、須藤但馬　上原郷郎（以上三人ハ出張命令ニアリシコト）川名謙藏（明治三年七月ヨリ九月マデ）木原均（明治三年八月）定詰伊藤榊、遠藤元行（西園寺氏兵頭氏池上氏報）
吉田藩　飯渕真澄　甲斐素雄　今村隼之進　高橋清藏　富永四郎（以上大洲藩史料足達氏）定詰森修吉　定詰甲斐順宣、武藤忠雄（確少参事二年九月大会所）（飯渕参事二年九月大会所）田中精太郎（飯渕参事随員）増美岩太郎（仝上）遠山新　存藤齊（以上六西園寺氏）
小松藩　黒川武夫（黒川猛雄武夫ト仝分）二股今朝松　定詰武藤浅平治　仝飯塚一郎　黒田佐之助、佐伯琢右ヱ門（登、金陵日誌、池上氏、其他）
大洲藩　武田亀五郎　西谷正道（以上大洲藩史料足達氏）西谷琳藏、金陵會議一名四国會議

松山藩　西谷彌藏（以上金陵日誌、池上氏等）
瀬尾登藏　岡宮小左ヱ門　野中宇門　藤野友之進（以上大洲藩史料足達氏）
定語　吉村嘉續　今德永義史　今伊藤勇　久松志津馬（以上金陵日誌、吉田藩誌、新谷藩日誌、池上氏、西園寺氏報）　藤野進　長屋忠明
（以上二人慶應後改名ノ名ニ見ル、篠崎氏）

新谷藩　矢野淳作　津田順藏　松村操（以上大洲藩史料足達氏）　谷村（名不詳、金陵日誌）　一井清（西園寺氏）

今治藩　米倉貞吉　丹下量平　定語　玉井八弥（以上大洲藩史料足達氏）
竹元平之進　書記　渡辺章、富田賢三（以上金陵日誌、池上氏其他）

西條藩　長谷川典一、服部要藏（以上大洲藩史料足達氏）　和田東作　和田四郎、山井幹六（以上金陵日誌）（小川恒藏公議人ニアラズヤトノ稱念アリ）

多度津藩　野間傳藏　小崎謹之助　中村三千藏（以上大洲藩史料足達氏）　平野俊治郎　岡田眞治　庭村希之助（明治三年正月）　中村林藏（三年）
林勇藏（明治三年）（以上金陵日誌）　勝田周藏　野間利右ヱ門（以上篠崎氏）

丸亀藩　浅見勇馬　木村正一郎（以上大洲藩史料足達氏）　新井弥學　勝村興
惣　村瀬弥三郎　定語　青木（名不詳）（以上池上氏及金陵日誌）

高松藩　野口吉右衛門　松崎駿藏（以上大洲藩史料足達氏）　渡邊弥八郎
松崎駿谷（以上金陵日誌）　福家清太郎　松本母貝四郎（以上篠崎氏）

徳島藩　瀧直太郎　森信衛　武屋ツラ（童役）（以上大洲藩史料足達氏）　山内十寸
坂隼之助　森武左衛門　定語　松岡毅之進　小笠原（名不詳）
武市（名不詳）（以上金陵日誌）

参考　徳島ノ根本熊次郎翁ノ話ニ、徳島藩ノ周旋方ヲ勤メタ人ハ上記ノ外ニ澤山アル左記ノ人々ヒ周旋方デアツタカラ或ハ金陵会議（出席シタコトガアルカモ知レヌトノ）デアル。
大山廉之進　富田中屋敷　お徒　武智高吉　富田中町ハ鴻者ノ子小奉行
水野栄光　出来島　組士　長谷川安道　医師　小姓　福屋義州　大岡、長湘　小姓
右ノ外淡路カラ来タ若干ノ佐藤直太郎　小姓　伊藤金吉　小姓　小塚ハモ正室
不明　小姓　穂積徳三郎　組士　等モ四国會議ニ出席セル　様デアル。
会公翁ノ話ニ公議人デアツタ橋本希之助ハ助任西町晩翠先生ノ養子デ小奉行
金陵日誌一名四國會議

出内十寸ノ地位西町ノ組ナ。故ニ其ノ大畑山王表組ナ デアッタトニハレタノ

第八　金陵會議所ノ規則

四国會議ハ上記ノ如ク明治二年四月ニ第二回ノ大會ヲ終リ後弐年十月ニ第三回ノ大會ヲ開ク予定ヨリハ會場ヲ琴平ニ移シテ翌明治三年四月ニ開催シタノデアル。

レタノ十月ノ大會ニ於テ土佐藩ハ右ノ如キ意見書ヲ以テ其ノ出シタ。

會議所要旨ニ越意書之長約然タリ依ル二集會交通之際諸各藩國

ヨリ本邦之見不異ト雖區々之事件ニ至自然不同有之故未其知之

實効不顯ニ似タリ是最會議之所憂也從来藩々各正私名以テ其國政

ヲ維持スル藩幕府ヲ不能

今也　朝廷中興郡縣之名義ヲ正シ天下之政一致ニ歸セントス何ソ

區々ノ議論アランヤ更ニ各藩々ノ一洗シ虚不共和是勉ノ要ニ存

失ヲ計リ朝政ヲシテ流行セシメ遠ク宇内之形勢ヲ察シ近ク大八洲

之事實ヲ酌ミ　皇國卓然所遵之道ニ注意シ四州一心力ヲ王事ニ盡

サントト欲ス

一、會議所轉地最可ナリ

一、大權參ノ事國事多ク各藩同情時々出會不向カト追々出張之人物、各

政府之意ヲ精選スベシ。」ト即

此度度々開カレタ集會ヤ交誼ノ時ニ実験スル所ニヨルト各藩大体ノ

意向ハ共ニ今一ナレ此ヒセノ小事件ニ就テハ従来ノ仕来リ若藩

等ニ因ル関係デモ有ラウカ自然遠慮ヲ要シテ和合一致ノ

実効ガ見エヌノハ会ヲ終トシテ最モ憂ヒル所デ有ル分ハ既ニ

郡縣ノ名義ヲ正シ封建制ヲ廃シ

ル、此ノ際ニ於テ各藩共藩籍ヲ

ソノ処要ハナイ。宜シク各藩共藩籍ヲ

大日本帝國ノ事実ヲ論ジ論争スル必要カアラウカ

一心協力シテ朝廷旨ヲ奉体シ

以テ王事ニ尽サレンコトヲ欲、スル

又會議所ノ位置ハ琴平ニ於ケル

朝政ヲ実施流行セシムルニ力ヲ

金陵會議一名四國會議

地ニ轉地スルヿモ最モ良イダラウ。

又大權參事ナドノ出席トスル事ニ出テハ又ハ藩共事情ハ同様デ同事多端ノ際故重役ガ時々藩地ヲ離レテ茲ニ出席ノ都合ガ悪イ向モ有ラウカラ、向後出張人物ハ大權參事ト限ラズ、各藩ニ於テ其ノ藩ノ意脈ヲ十分ニ達シ得ル人材ヲ殊ニ精撰派遣セラレタイトノ意味デアラウ。又テ[illegible]ノ模様ヲ窺フベキデアル

今金陵會議所ノ規則ヲ左ニ示ソフ。

金陵會議所規則

一各藩御交際稱呼者總而從前御西敬之旧例ニ效ヒ可申事

一、大ニ朝權ヲ張リ国政ヲ維持スルヲ以テ今日ノ方向目的トスベシ

一当今會議所ニ而議事ノ模様ニ寄　天朝ヘ向等總テ月幹番ニ而天裁ヲ受ケ然後御各藩江通達之事

一、藩々政事ノ大体ニ関係スル事ハ成丈會議所ヘ持出公議ヲ取之事

會議所出所之人ハ藩々政府関係、憂國之士人撰之事、

右者昨年来当會議所相立候処未至実効依而各藩ニ於而今一際憤發盡力仕屹度實效相立自然　朝廷御輔翼之一端　共相成可申与決議相成候事

六月

此ハ改訂肥後藩国事史料ノ内、一新録探索報告ニ出テ居ルモノデアル、此ニヨツテ当時四国會ノ規則ガ明瞭トナツタ。六月トアルハ、午、即明治三年六月ノ事デアル。三年六月以前ニモ必ズ又規則ガアツタデアラウ。ソレハ如何ナル成文カ詳ナラザルモ、前掲ノ意見書ト對照シテ見ルト会ノ成績ハ最初ニ豫期セル程ノ大効果ガマダ挙ツテ居ナイ事ヲ物語ツテ居ル。

第九　金陵會議ノ議事々項

此ノ會ノ議事々項ハ

一皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守シ違背ナカラシムルヿ（後議）（篠崎脱）

一、會議所ノ規約、規則等

一會議所ヲ琴平ニ移スコト一、自今此會議ヲ金陵會議ト称スルヿ、

一、公議人ノ担当事務及人数一、公議人ノ人数等　坚主ニ明治二年四月頃ノモノカト思ハル。

金陵會議一名四國會議

一、月幹ノ件（毎月三回但下月番ニテ取扱ハズ之ヲ幹事ト称ス）（三年十月十日）
一、前會ノ規則ノ儀ヲ論議ス（三年十月十日）
一、金陵出張所入費見積（三六六三両余来七分五厘）（三年十月十日決定）
右ハ金陵日誌ニ記載シテル所ニテ金陵会計関係ヨリヤ又英国張所関係ヨリカ他ノ関係文書少々或ハ之ト関係カト思ハル尚ホ調査ヲ大方デル。
一、近路取調ノ件（三年正月十五日 差戻）
一、浮浪應接ノ事（三年二月廿三日 差戻）
一、廢佛、徒刑、會議所廢止ノ儀（三年四月五日）
一、規則論（三年四月十九日）
一、方角論（三年四月十九日）

歳入凡 絶高七万三千〇五〇石余（内訳ハ別紙ノ通リ）
歳出合計三四万六六六〇石余（内訳ハ別紙ノ通リ）
差引不足米一六万五三一〇石余 別ニ請取リ。
（内訳ハ別紙ノ通リ）
（三年正月十五日 差戻）
（三年二月廿三日 差戻）
（三年四月五日）
（三年四月十九日）

一、東未出張人ハ退席ノ上今後重職討議ノ節ハ出張会議ノ件（三年四月十日）
一、會議規則ノ件（三年四月廿二日）
一、廢刀之儀（多度津藩提出）（三年五月朝日差戻）
コト（三年五月朝日差戻）

一、廢刀令ヲ以テ本全国ニ布カンコトヲ太政官ニ上表スルコト（三年五月六日放棄）保留
一、廢刀令ニ関スル上表ノ件。前日欠席住岳海同意ヲ表レ（今二月八日改議、実行準備ノ上）
一、徳島藩ニ動揺アルヲ以テ全藩ヲ助クルノ論出ヅ（三年六月廿日）

参考、淡路ハ阿州ノ別邑ニテ稲田家ノ所領ナリシガ明治三年廃藩以来不満ノ兵ヲ募リテ騒シクナリタ。今三年五月阿州公稲田九郎兵衛ヲ追討ス。稲田家ノ所領ナル須本城ニ籠城ス。四日東京ヨリ着報アリタ。其他ハ省ク。阿州ハ淡路ノ須本城ヲ攻落シ稲田九郎兵衛ヲ追討ス。
カト牛詰メニ及ビシ処其方ハ件ノ水県ガルヲ以テ一戦ニ及ビ候ニ付テハ須本城ヲ攻落シ稲田九郎兵衛ヲ追討ス。
タルハ即死四十三人、生捕二百余人、又本領ノ方ノ手負人死人四人ソノ内二人ガ死亡シタノデ稲田ノ一党ハ井上九郎右衛門ノ家内不残殺シテ自殺シタ由。

一使者扱、話生扱ノ件（三年七月廿日）
一軟全ノ議（薄様堤談　三年七月廿日）
一、海賊取締等ノ議、一、駅場等ノ議（上坂二件、三年月合）
一、海賊防禦ノ事（多度津拠堤設）。
一、驛場ノ件（未決）（以上二件　三年八月十日）
一藩領陸地ノ議（月日不詳）地ヲ以テ分割ノ三藩ヲ盟約ニ入ル先提唱ニ北藩結奉還ノ建白ヲナシタ
明治三年六月七日　朝廷ハ右ノ議ヲ加納セラレシニ各藩主ヲ以テ知事ニ任命シタ。
一、廃藩置縣ノ件。（年月日不詳）　明治四年七月　廢藩置縣ノ詔ガアリタ。
一、銀券ノ事　（年月日不詳）
其他別子銅山ノ件、水論ノ仲裁、境界争論ノ裁決、各地探索報告等ハ
其一斑デ　猶ホ澤山ニ重要ナモノガアッタデアラウ、ホガ十分ニ其資料
ヲ得ナイノハ残念デアル。
此ノ會デ海賊ノ取締ヤ防禦ノ事ヲ議シテ居ルガ之ニ因ッテ各藩ヘルト四國
近海ニ海賊ガ横行シテ居タラシイ。此會ノ決議デ明治三年十月海賊取
締出張所トイフモノヲ四國ノ沿革ニ二十數ケ所置クコトトナッタ。即チ新谷
藩ノ一ケ所、大洲藩ハ三ケ所、松山藩ハ三ケ所、吉田藩二ケ所　西條藩一ケ所
今治藩二ケ所　多度津藩一ケ所　高松藩三ケ所、丸亀藩二ケ所　高
知藩三ケ所　同預リ所三ケ所（川之江、桑村ノ二ケ所　以上三ケ所、外ニ徳島
宇和島両藩ニ数ケ所ヲ設置スルコトニ成ッタ。（高知藩大参事ノ通達ニ依ル）
以上ノ外四國會議ニ於テ色々ノ事ヲ協議シタ、其例ヲアゲルト。
ノハ藩デ調査研究シテ後カラ報告ドシテ居ッタ、其例ヲアゲルト。
明治三年八月朔日高松藩出張ノ松崎俊藏カラ佛式教師扱方等ニツ
キ高知藩出張人ヘ委細尋合ガアッテ後日高知藩カラ回答シテ居ル。
又今日徳島藩山内十十カラ馬術執行ノ事ヲ相談ガアッテ此ノ後日
高知藩カラ回答シテ居ル。
又明治二年十月ノ大會デ各藩重役中ハ松藩ノ者ガ土佐出張ノ重役
ノ藤次久馬、本山只一郎ノ二人ヘ留學生ノ相談ガアッテ翌年十二月松

藩士喜多川千太郎、近藤久吉、武司勇記等ガ経学修業ノ為メ高知ヘ来テ、シバラク修業シテ帰ソタ。

参考　明治二年十二月八日　小松藩来状

一筆啓上仕候時下寒冷之節各様弥御安泰可被成御勤仕恭賀之至ニ奉存候然者藩士喜多川千太郎、近藤久吉、武司勇記義経学修業之志御座候ニ付兼而金陵御會議之節被仰合之御趣意モ有之　尊藩江御依頼申修業為仕度此度一同推参為仕候間乍厄介様市藩士同様之市取扱ヲ以市世話被成下候様偏奉希候右市依頼可得貴意如斯御座候　恐惶謹言

一柳般助　壽静　[illegible]
喜多川銕太郎　久徴　[illegible]

齋藤弥久馬様
元山只一郎様
右ノ返書

御札致拝見矣如仰寒冷之節各様弥御安康被成御勤仕矣由敬賀之至ニ奉存矣然ハ兼テ琴陵市会議之節市談合之趣モ有之　尊藩士三人経学為修業当藩ヘ市差越被成弊藩士同様之扱ヲ以致市世話矣様委曲市帰面之趣致承知被入市念市義奉存候右市報為可得市意如此御座矣　恐惶謹言

十二月八日

林　亀吉
本山只一郎

喜多川鉄太郎様
一柳般介様

明治三年五月徳島藩ノ使者伴剛太夫、山内十寸ノ二人阿州稲田騰援ノ件ニ付来高シ、仝十五日使者ノ用務ヲ終テ高知ヲ発足ス（高知依ル）。仝月十八日琴陵駐在ノ田岡小文ヨリ徳島藩動揺之義ニ付高知藩廳ヘ通知ヲ発ス。

仝月廿四日土佐藩、弘田久吾　植村原次郎ニ命ジ明廿五日高知ヲ発シ阿加ヘ

金陵會日議一名四國會日議

差立ラレ稲田騒擾ノ事ヲ取聞ヲ取ヒ。（高知縣法）
今年六月吉田藩使者飯渕大参事高知縣臣「春ノ頃ヨリ吉田領内ニテ
農民ノ沸騰騒擾スルコトアリテ之ガ為メ吉田藩ヨリ高知藩ヘ依頼ニヨ
リ高知藩ハ諸役方始メ手当テヲナシ遣ハシタル禮ト全段會議ヘ遅ー
参ノ挨拶ヲノベラレル為メニ来藩シタ。下町商家ヘ諸藩重役御使者宿）
岡村繁十郎宅旅館ニ投宿シ傳事廳小参事小坂忠右ヱ門ガ今旅宿ヘ
応接ニ罷越シタ、七月三日ニハ飯渕大参事ガ高知藩政府ヘ出頭シテ小坂
忠右ヱ門ノ案内デ知事殿ニ面謁後權大参事小南五郎ガ罷出テ
挨拶ガアツタ。
吉田藩知事ヨリ高知藩知事ヘ口上
嚴暑之候愈御恭然被為入珍重御儀ニ奉存候春来管内農民沸騰付
テハ大参事衆迄本藩大参事御依頼申矣所も有之御笈轉地御境上江
諸役方を始御手当も被遣矣候承知ヒ仕厚恭次第被存矣比節鎮静
相成矣ニ付御挨拶且將来猶又御依頼之儀以御使者ヒ仰進矣事。

別段ニ
昨春来琴陵御會議ニ付テハ早速御頼御使者可ヒ進の所御一新ニ際藩
制改革ニ藩人少の儀彼是遅延相成甚不本意ヒ存矣比度右遅延且御
依頼之儀もヒ仰進先事
右之趣大参事衆權大参事衆江も宜申達ヒ申付矣事。
右ニ對シ高知藩知事ノ返答
比度御使者を以て縷々御懇意之段深辱存矣ヒ仰下先件々委細領承
申矣御依頼儀御同様ニ御座ハ比ヒ知事殿ハ宜敷願度先以上。七月三日。
七月四日ニ飯岡大参事ハ高知ヲ発シテ吉田藩ニ無事帰着谷之通リ復命シタ。
（以上吉田藩記録ニ依ル）
明治三年八月ニ松山藩カラ高知藩ヘ文武各修業ノ為メ講習生ノ派遣ガ乃タ。
其節松山藩重役河東喜一郎ヨリ高知藩重役本山只一郎ヘ右講習生ヲ依頼
ノ書翰ガ到着シタカラ本山重役ハ左ノ返答ヲ発シタ。
松山藩ヘ後書

尊書拝閲仕候弥市清雅市奉職之旨奉抃喜候然者此度尊藩之清子市
来臨被下矣得共文武教及共素ヨリ未熟ニテ市切偶之益モ無市産ト
却テ報教之至ニ奉存先市分袂云々之趣市内情ニテ小生紫鹿々相済
シ申矣市拙察可被下矣右市酬勇草條如此市産ハ　頓首百拝

八月廿四日　　本山只一郎

河東喜一郎様　掛下

又今年九月ノ琴陵大會ニ高知藩片岡健吉出席シ今時出席セル松山重征
野中宇門ヨリ神式葬儀扱方等ニ付質問ヲ受ケ、神式ノ扱等ハ目下高知藩ニ
於テハ規則起稿中ニ付帰藩ノ上同職トモ協議ノ上回答シヤウト約束シタル所今
年十月ニ野中宇門ヨリ神葬式草稿ヲ懇望ノ来翰アリケレバ今草稿未定
本ニテ無據所市分与シ難シト謝絶シタ其書翰ハ左ノ如クデアル
尊翰拝閲仕矣先以愈市壮穆可被成市奉職旨抃賀之至奉存矣随而僕
儀無異消光仕矣間乍慮外左様市静慮可被下矣扨琴陵市出會之砌神
葬式草稿市懇願ニ付帰藩否同職之者ヘ相談矣処右ハ未定本且取捨

最中之儀ニ付極々不工面之趣申先其形市断申上矣様川ノ江誥森服
唯次郎ヘ申遣矣処今以市掛合仕不申或ト恐縮仕矣右市酬申上度草
々如此市産候　謹言

午十月八日　　片岡健吉

野中宇門様

尚々逐日冷寒相催矣間市愛護可被成矣且琴陵ニテハ殷ん市懇情
被成下千萬奉謝矣乍席市挨拶申上候　頓首

別白

過日者市政府ヨリ市丁寧ニ其物市贈被下政府一統忝拝戴仕矣且市
修行生市来臨ニ相成矣得共教及共未熟ニテ市進益ニモ相成不申却
テ報教之至ニ市産ハ乍席市礼旁　草々頓首

午十月八日　　片岡健吉

野中宇門様

以上議事ヤ会議ニ関係シテ起ツテ事件ヲ記シタノデアル。

（以上高知藩記録）

金陵會議及四國會議

第十、四國會議ト他藩トノ交渉

四國會議即金陵会議ハ全國各藩ヨリ注目ノ的トナリ居リテ他藩ヨリ使者ヤ周旋方ガ探索ヤ其他ノ事情ニヨリ来訪シテ會議ノ組織状態ヲ視察シ或ハ種々ノ問題ヲ提出シテ之ヲ研究シ又ハ見學シテ帰途ニツキシモノヽ如ク或者ハ十五日以上モ滞在シテ居ル、詳細ハ不明ナルモ記録ニ徴シ其一、二ヲアグレバ

明治二年十月廿日ニ豊後ノ國岡藩ヨリ来訪

仝　月二十一日ニ盛岡藩　立川三助　以藤森之助来訪

仝年十二月　五日ニ豊後國府内藩来訪

仝　月十四日ニ雲州人来リ議論ス、

仝　月十五日ニ駿州藩ノ奥田小八郎暦ニ来リ探索中仝十六日ニ来訪、翌年正月迫滞在ニ付正月元日仝人ヲ招キ饗応ス。

仝三年正月　四日ニ長州人来ル（七日ニモマダ滞在セルコト記録ニ見ユ）

仝年仝月七日ニ松江藩来ル（シバラク滞在）

仝　月十日ニ岡山藩ノ本城新来ル、琴陵ノ佛像ノコトニ付キ来レル由（詳細不明、仝十九日ニハ本城新ヨリ来、状アリ、其内容亦不明）

仝年二月廿一日ニ長藩人来ル。詳細不明ナルモ、正月四日ニモ長人二人来数日滞在セルコトアリ。当時長州ニ暴徒起リ、山口藩デハ之ガ鎮撫掃蕩ヲナシ、主謀者ハ死刑ニ処シ其他入牢流罪自宅謹慎等ニ命ジタル由ニテ其累徒中ニ大楽源太郎ト云者アリ。此度ノ挙ハ得止ザル次第デ諸隊長官措置失当ヨリ起リタルモノデ最早取カヽレモ困難デアラウ。是非之ノ件ヲ四國會ヘ出訴スルモノト見エル云々ト記シタ文書ガアル果誰カカラ四国會議ヘ訴ヘ出タカドウカ之亦不明ナルモ四國會議ノコトハ所長田夫実ニモ出デ居ルコトデモアリ。当時此會ヲ前後二回モ長人ノ来リ滞在セシコトハ何カ理由モアラウト思ハレルカラ、今左ニ熊本ノ宇野東風氏ヨリ贈ラレタ資料ヲ載録シ仝氏ノ御意見等

且併セ記シテ参考トシヤウ。

訂改肥後藩國事史料巻十（侯爵細川家編纂）

明治三年二月某日山口藩大楽源太郎諸生数名を鶴崎に派し
毛利到に窮状を訴へ援助を求めしむ

（鶴崎毛利文書）

拜啓先以御佳安被為在奉珍賀候于今禁錮此節に至九死一生
の中に罷在候御憐察是祈於此弊藩の内訌諸隊長官措置
失当より相起り最早恢復六ヶ敷三千之兵士ハ金鎮の中に在り
皇國の大乱先自弊藩始候誠に悲泣称哭の至闔國の様子定て
聴及可被遊候半と奉存候小生共計畫雖極施脱切歯而已此輩も
不得止棄父離母何も包骨泣泰の情實を以て拜趨仕候間御引
接被下憐憫の勢ひ難極候く、も不届不撓正氣を主張往先の目的
等兵々も御指揮奉願ひ候也四國十三藩の會議所えも可参志と
相見候其外御指揮を以て何れなりとも跋渉仕候様奉願候別て
願い度事は檄文に御座候是非先生之正筆を以て四海を感動仕
らせ皇國今日の勢是非共和合從の外無之乎と奉愚考候此儀は
此輩の口頭に付候間内乱始末御聴取是祈發船切迫不能縷縷
萬々御諒察可被下候乍失敬御家内様へ宜布御傳奉願候時下春
寒為國御自珍専一と奉存候　草々敬白

朝風再拜

冷咲危先生

函文下

二白先日拜趨之桑山生其外皆在金鎮中亮之々々

東風按右冷咲とは毛利到、肥後藩領豊後國鶴崎人私塾を開き文武
を誘導し又有終館の教職たりしもの、
朝風は大楽源太郎のこと此書日付なけれとも山口藩にては二月
十一日に暴徒を掃蕩し翌日各官吏の黜陟を行ひ暴徒の巨魁
を獄に投し連累者に謹慎を命したることあり、又二月（日不明）
大楽源太郎が毛利到へ贈りたる書に昨冬十一月兵制変革

事ヨリ今年正月暴動ニ至ル迄ノ出事ヲ詳報セシモノアリ且大樂ノ兎山豚五郎等十数人脱れて毛利ヲ便りて鶴崎ニ来ることあり前後ノ事情ヲ挙テ前ノ書ヲ二月中ノコトヽ推定セリ。此書ヲ携ヘテ毛利ノ家ニ到リシ人名及此後ノ行動不明、毛利到が此書ニ答ヘタカ如何、何モ口確記録ノ存スルモノナシ。東風先年毛利家ニ就きて到ノ子ヲ莫ヒといふニ仍より大樂ノ書輸ヲリて展示されしヲ筆写せしものの即ち翻刻書也。

備考　三月朔日山口藩暴徒千餘ヲ放シ翌二日ハ暴徒ノ頭立者三十餘人ヲ死刑ニ処シ其他入牢流罪及ビ自宅謹慎等ヲ命ず。三月五日長州暴徒大樂源太郎護送者ノ目ヲ欺みて逃亡シ後豊後鶴崎ニ至リ有終館ニ投ス

今年三月二十日ニ佐賀藩ヨリ来訪セシ者、本藩（高知）ニ向ヒ発足ス、

今　月二十五日ニ秋田藩ノ吉成良助来訪、

今年四月四日ニ豊後ノ森藩ヨリ来訪、

今年六月二日ニ久留米藩ヨリ船葉十郎来リ田岡小文應接ス。

他藩ノ交際ニソキテ猶大ニ研究ノ余地アルヲ以テ後日ノ研究ノ為メ諸記録ヤ篠崎氏談話等ヨリ、トリタルモノニテ或ハ誤リナキヲ保シ難シ。

會議ニ関係セル各藩出張人ノ宿所ヲ附記ス。最モ此ノ宿所モ

土佐ハ内町森屋喜太郎方ヲ旅宿ニ

郎、島村寿郎、田岡小文等ノ居リシモ本陣ニ接セルヲ以テ始終ノ居リシニテアリ。或時ハ一人、或時ハ二人トイフ風ニ様ニ思レ程デ所謂定宿トイフ程デハナカリシ故、土佐ト人ノ森屋トノ此所ニハ一中隊許リノ兵士モ出在シテ居ルヲ以テ誰カノ居リシカ旧天領地其使人ヲ採用シテ土佐兵ト称時代デ土佐ノ兵隊ニハ余リ力ノ入ラヌモノモ少クナカリシ様デアル。此ハ會議ニ直接関係ナキガ、若徒輩リ例ノ土佐御取扱ヒトリタル宿地ヤ川原塚ガ會議関係ニテ居リタル事ガアル。美好ナル時

附記ニテオク。

今ヒク土佐代表ハ内町ノ御宿旅館ニモ居リタル事ガアル。

金陵會議ニ名四国會議

云フ右ノ経過デ三好等ハ
松山藩ハ管納寛ノ所ノ書院ヲ借
光院ノ家老磯ノ紛メレ家柄デ琴平町金西山ニ在リ
野進ナドハ此処ニ居タ。
今治藩ノ玉井八蔵ハ宇西山ノ前藤芳助ノ家ニ家族連レデ引越シテ
来テ居タ。前藤家ハ金毘羅ノ参道役ノ家柄デアッタ由。
金藩ノ池上郁五郎ハ吉旅館デアッタ。ヒシ吉ハ内町ノ與倉
屋吉右エ門ノ経営スルモノデ池上ハ明治三年九月ノ大会出席ノ
一夜此所デ自殺シテ相果タ。有田来訪
高松藩ハ高松屋、岩本トイフ旅宿ニ一校ニ分ケ
宇和島藩モ高松屋ニ陣ヲ取リ
丸亀藩ハ内田森屋吉音ヲ即チ
多度津藩ハ西山ノ大塚(佐藤ノ家)ニ
勝田周蔵、野間某、ノ二人ハ
カデト、

第十一 金陵會規則ヲ改ムルノ議ト金陵會日議所廃止

金陵會議ハ明治三年九月(前掲)ニ秋季ノ大會日議ヲ琴平ニ開キシガ
其際金陵會ノ規則ヲ改ムルノ議出デ、之ヲ可決シ多、其時高知藩ノ提議
案ハ、

改金陵會規則議

凡内外ノ利害及政治ノ得失ヲ詳悉センガ為メニ一會議所ヲ設ケ議
アレバ必相図リ動静必相通知セントス是藩藩ノ願ニシテ諸君
子是ニ應スル所以ナリ嚮キニ兵隊屯ノ議ニ在ルヤ政治ノ体裁一範
ニ出ルニ非ス、時ヲ亦紛々今日ノ静且穏ノ如クナラス其議スヘキ
者亦多シ今ヤ郡縣ノ世トナリ天下治體一轍ニ出テ且 天朝議
院ヲ開キ大ニ衆言ヲ采ル、有志ノ輩出テ献言シテ可也夫金陵 皇都
ヲ去ル殆三百里今日新ノ時ニ当リ三百里外ノ地ニ在テ相議シ以テ
此ヲ 天朝ニ奏セント欲数十日ヲ経サレハ達セス其言既ニ後ル、
ニ非レハ則亦空言ニ帰ス改ニ藩ノ意従前會議ノ体ヲ変
シ四時ヲ以テ正権大参事相會シ施政ノ得失ヲ相議シ動静相

全院會議ニ於テ四國會議
通知スルニ如クハナシ其地ニ於テハ則道後、東ハ則金陵兩
地特ニ四國中ノ都會衆人輻湊時情ヲ狙ルニ於テ亦益ナキニ非
ズ冀クハ諸君子此意ヲ諒シ前日ノ轍ヲ変センコトヲ欲ス

庚午九月

之ニヨルト年四回程重役が道後カ琴平デ會議シヤウトカフノデアルガ
討議ノ結果ハ原案ヲ多少修正可決シタヤウデアル。即チ集會ハ地ノ豫
定セル時アツテ集會ヲ催シ、親睦ヲ図ル議事ヲシヤウ」トカフコトニシタラ
シイ。然シ此ノ決議ト全時ニ琴陵ノ會ノ廢止論が起リ
が成立スレバ後ハ必ズノ談ガアル所ガ事實ノ暴ニ四國會ノ廢止論が起リ
テ金陵會議所ヲ廢止シテ會ガダヲ布ケトカフ事ニナリタノデアル。ソ
ノ四國會議廢止トイフ事ハ何ヒとうト起リ、如何ニ進展シ、結局如何ニナリシ
カニ就テ述ベント大体左ノ通デアル。
明治三年ノ半頃ニハ明治新政府モ基礎段々鞏固トナリ諸藩関ヲ追々
備ハリ全国ヨリ公議人ヲ徴撰上京セシメテ會議ノ関ル件ヲ制ヲ実施セラレ

コトニナリ、ケレバ八月廿八日政府ヨリ辯官ヨシテ土州藩ノ公議人ニ命ジ
テヲ解散セシムルコトニナツタ。
吉田藩ノ記録ニ今年十月（十三日又ハソレ以後ノ事ト思ハルモ日附記入ナシ）吉田藩ノ武
藤權少參ノ事ヨリ『昨春以来四州藩ヨリ左ノ通御内命有之候ニ付盛會相成且右ニ付琴陵同示談ニ致度
トモ差出ス。
八月廿八日土州公用人并官ヨリ御呼出、則罷出候處徳島公用人モ同時
ニ呼出ニテ土方中弁、中島中弁出張、土方ヨリ今日御呼出ノ儀ハ於琴
陵四國會ト唱ヘ朝廷ノ為ニ集會致来候其主意右書面徹致居候
得共此頃戦争モ止ミ先平定ト相成夫ニ付テハ右會議自今取消申度此
段ニ參リ候而ハ九州ニモ又奥州ニモ同断ト申事ニ相成候而ハ中ニ
ハ如何ヽ事ヲ議シ候様モ難計且於東京ハ議院モ被設置ヲ以朝廷
ヘ盡ス事当地ニテハ如何ヤウトモ出来可申ニ付右ヽ段々度々ノ達ニ
テ會議ノ関ル件ヲ制ヲ実施セラレ

一、右琴陵會議廃止ト仰出候所東京土州藩板垣退助ヨリ十三藩公議人ヘ示談有之候ハ右ノ通廃會ト相成候ハ實ニ無拠事件ニ有之候得共未全ク平穏ト申時ニモ無之此上猶更親睦之道ハ相立申度各藩互ニ参事ノ内往来折ヽ親睦且會藩政向相談モ申度ト申出候處、各藩一同異存無之由

右之件ヲ以テ於琴陵モ益親睦之処折ヽ参事藩々ニ往来致可申トノ外無之ト一同決議之旨當月八日迄ニ各藩不残琴陵引拂候事。

参考　四国會議解散ニ関聯シテ西京詰合ノ四州各藩役人集議ノ結果、西京詰合四州列藩公用人中ヘノ照会セルモノヲ左ニ掲グ。

宇和島藩東京日誌ニ「一、九月朔日高松藩伊藤三郎ヨリ別紙之通京都表ヨリ申越候趣ニ而廻章差越候事

（別紙）然者四州列藩議員御中御集會之上西條表詰合の者以来廃会と御決議之一條徳島御藩ヨリ御報告ニ付當地ニ於テモ御各藩集議仕候処是迄追々集会の有無ニ寄り強而在京致居候次第ニも無之

小処昨夏金陵より月輪之御藩々登京ニ而乃形勢探索被致度旨ニ申出候得共其節ハ為指異件モ無之故ニ付向後ハ當地探索ハ御許諾合之者集会ニ有之處飽迄致探索其段報告可致旨約定ニ而金陵会議之一助ニ相成居申候得共追々時勢甚遷遂ニ今ニ至つてハ御藩々之御都合ニ而既ニ御差置被成引拂相成候共聯集会之実深仕候義ハ無御座候間在京之者全ク懇親の為毎月一度十三日より相定會席致候間何卒御同意ニ付決議ニ相成申候、当藩月輪ニ付左様為報知如此ニ御座候　恐惶謹言

九月十九日

西京詰合　高松藩　吉田和一
一井新吾
松山藩　加藤庫助
佐治権左衛門

四州御列藩御公用人中様

此等ノ記録ニヨツテ愈々九月大会デ解散ヲ決議シ、今年十月八日迄ニ各藩

出張琴平法ノ為ガ引揚ゲントナリ追々引揚ゲ統ニ後ハ自然吹倉ハ止リテ仕舞ノタモノラシイ。

最モ此解散ニ就テハ別ノ理由ヲ解散ヲ主張ノ為メ高知藩ニ於テ土佐ノ近時財政困難トナリタル次第ニ付キ改革ノ任ニ当リシ谷守部片岡健吉等ハ政費節約ノ手始メト此会ヲ廃止セントシテ明治三年七月廿四日谷片岡ノ両人相携ヘテ東京ヲ帰途中横刀琴平ニ立寄リテ先ツ其旅宿高知屋清右エ門方（金陵倉ト称ス）ニ会シ夜更ケ迄談論激張ノ末遂ニ谷ハ其儘ニ片岡ハ一旦分宿ニ帰リ仕舞ヒ翌朝又谷ノ宿ニ行キ昨夜ノ談判ヲ繰返シ居タリシガ遂ニ谷ハ猶蔵（カ）ト云フ坂本ノ山内十万石ノ家老ニシテ当時ハ高知藩ノ重役ニヤ、名ハ忘レタリ）ノ四士ヲ招キ、谷片岡両氏ノ酒宴中ニ交ヘ意見ヲ交換シテ、四国会ノ最早不用ニ付解散ヲ説キニ直ニ賛意ヲ表スルモノナリ談論百出ノ状態トナリ宴未ダ終ラ谷片岡両士ノ廃止論ニ反対ニ終ニ当夜ハ破談ニテ両士先ヅ退席ニ、翌朝吹キ別レノ体ニテ谷ガ翌廿五日例会ニ帰リ掛ケ会ヲ治メタ鬼松山西條欠席其他ハ皆出席ニテ坂本之助ヨリ知事様市存寄書ヲ指出スル旨ノ申渡谷及片岡両氏立腹命ヲ賤政改革ノ命ヲ受ケ帰藩ノ際ニ豫テ藩知事ノ存当会ノ所廃止ノ件リハカリニ決シ之ヲ決議ニ及フ筈ニ一変シテ閉会シタ。

限山治謀録ニ

四国会議所ヲ琴平ニ設ケシ主旨ハ前ニ述シ如クナリシ人撰其人ヲ得ズ各藩又相会日ニ酒色ニ金銭ヲ消費シ国家ノ事ニ於テ何ノ得ル所モ無ク大ニ目的ヲ誤リタレバ政費節減ノ手始トシテ此ヲ解散スルコトヲ東京ニテ板垣初メ諸士ニ謀リシニ皆ナ同意ナリシヲ以テ谷片岡ト共ニ帰途金比羅ニ立寄リ四国諸藩ノ代表者ヲ西金ニ会シテ解散スルヲ発議セリ然ルニ議論紛々トシテ一致ス能ハズ遂ニ金等両人ハ幣ノ藩ハ議已ニ決セルヲ以テ代表者ヲ引取ラムベシト切言シテ破談ニテ別レ帰国シ次テ帰国ヲ命ゼラルルヤ帰国ヲ命ゼラレタリ

ビリトイフハ従前会費数回ノ経テ九月ノ大會（之ハ十月ニ充ベキヲ九月ニ繰リ上ゲテ一日モ早ク廃止引上ゲヲスカノコ）ヲ開キ、表面朝廷ノ命ニヨリテ解散ヲナシ、代表者ハ其当面ノ各々帰国又ハ帰国ヲ命ゼラレタコトヲ云ッタノダラウ。

尤モ角金陵會議ハ明治三年十月初カ九月末ニ解散トナッタ。

九月ノ大會ハ下旬ニ終ッテ居ルカキタ分会月末ノ解散デ出発ノ準備ヲ引揚ハ十月上旬デアッタラシイ。

従ッテ

明治三年七月廿二日　大阪出足、漢賀船ヘ乗込、金三日九亀沖ヨリ九亀ニ上陸止宿ス。日金陵泊リ。同廿五日川ノ上泊リ、同廿六日川口泊リ、同廿七日高知着ス。又同書同年ノ内ニ

八月二日御用召引籠ル夕　大参事中御封書ヲ以　第三等官権大参事月俸十五名　軍務司係リ彼仰付之、

八月七日御封書ヲ以　第三等官少参事職給十石、

右御印章頂戴ス大参事中御横目ヲ以軍務司係リ、

九月十三日　大参事御切紙ヲ以金陵會議所ヘ被差立、明十四日出足御仕之

九月十四日出足書夜兼行、七日金陵着　同廿四日金陵出足、川ノ上泊リ　同廿五日立川、同廿六日本山、同廿七日高知着』ト

アリ、此時ノ大會ガ最後ノ大会ト成リ又當テ高知藩士ノ古老ノ話ニ現リ迎シガ当ヲ得ズ批難ヲ受ケテ司會ガ務マラヌ又某ガ國ニ帰ッテ藩廳ノ司令ヲ請ケ其時丁度藩会ニ付本山ヨリ迎行サセテ結局今回ハ之ニテ停會シ又時機ヲ見テ再開シヤウト宣セラレタガ其後會ハ開カレズ止ンダトイフコトヲ聞イタ事ガアル。此ニモ記ス如ク板垣氏ハ森ノ如前ニ依テ今本稿ヲ草レバ考ヘテ見ルト或ハ此三年九月大会後ノ、例會（終會トモ）カトモ思ハレルガ、小森、横山、本山トイフ三人ノ名前ヲ考ルト矢ハリ二年四月廿五日ノ例會ノ話ヲ司會宣セ得ズ、一時停會ニシテ居タノデハナカラカトモ思ハレル。サレバ暫ク当ヲ

金陵會議一名四國會議

藩政ニ參リシ古老ノ直話故茲ニ附記シテ置ク

如此ニシテ此ノ會議所ハ廃止トリ、會ノ規則ハ改メラレテ復此ノ會モ全ク廃セラレタモノデアル。』

金陵會議一名四國會議　終

附録目次

以下収ムル所ハ金陵會議ニ関係人物ノ略傳又ハ説明ナリ、精疎繁簡一ナラズ思ヒ出シヽマヽ書キ立テ特ニ高知藩ノ士ニツキテヨク且精ナルモノナリ、編者ガ高知縣ノ者ヲ能ク此箸人物ノコトニ就キ度々質問ヲ受ケシコトモアレバ主ナル者ヲ可成多ク記セリ他三縣ノ人物後日機ヲ得増補センコトヲ期ス。

一、板垣退助　二、片岡健吉　三、高屋友右ヱ門
四、高屋左兵衛　五、桑原平八　六、本山只一郎
七、林勝兵衛　八、谷守部　九、松下與膳

（附録目次）

一〇、乾　作七
一一、小森守太郎
一二、渡辺弥久馬
一三、中村観一郎
一四、八木彦三郎（本性宮地）
一五、川原塚茂太郎
一六、田岡小文
一七、島村祐四郎
一八、島村壽郎
一九、桑原　讓
二十、森股唯次郎
廿一、田手次太夫
廿二、鈴木震吉
廿三、須藤但馬
廿四、河原治左門
廿五、上原郷介
廿六、遠藤元行
廿七、不破忠次郎
廿八、加藤虎一郎
廿九、川名謙藏
三十、飯渕　縫
卅一、甲斐順宜
卅二、野中久徴
卅三、池上邦五郎
卅四、土肥大作

以上

附録

金陵會議関係者人名中、

一、板垣退助　名ハ正形　号ハ無形　通称ヲ以テ知ラル。天保八年高知城下中島町ニ生ル、山内氏ノ臣ニシテ代々禄三百石ヲ給セラル、万延元年吉田参政ノ抜擢ニヨリ兎奉行トナリ租税出納ノ事ヲ管シ、文久元年江戸藩邸ノ會計兼軍備掛ヲ以テ東上ス、仝二年累進シテ容堂老侯ノ側用人トナリ、江戸藩邸吏員ヲ総裁ス、此時天下漸ク多事ニシテ容堂公ノ為メ枢機ニ参シ、献替スル所多シ、爾来藩政ノ枢機ニ参ス、明治元年朝廷討幕ノ兵ヲ発ス、土佐藩ハ山道先鋒ノ命ヲ蒙リ、各地ニ轉戦シテ連勝ス、退助参謀トナリ威名隆々諸藩ヲ壓ス、東北平定シ凱旋後、其ノ勲功ヲ賞シ、特ニ御前ニ召シ出サレ賞金天杯ヲ賜ハリヌ。明治二年永世禄一千石ヲ賜フ、仝年徴士参與ノ職ニ任シ、三年高知藩大参事トナリ、藩政ヲ改革シ、四年参議ニ任ズ、六年朝鮮問題起ルニ及ビ西郷隆盛等

ト共ニ征韓論ヲ唱ヘ議合ハサルヲ以テ遂ニ明治七年、退助ハ後藤象二郎副島種臣等ト共ニ民撰議院設立の建白書ヲ上ル、後木戸孝允等ノ勧メニヨリ又一旦参議ニ任ジ、少時シテ又辞ス。十年退助汽笛健吉ヲシテ立志社ヲ代表シ、國會開設ノ上書ヲ西京行在所ニ上ラシム、十四年自由黨ヲ組織シ某總理トナレリ、当時海内ノ有志多ク其黨ニ加ハリ、民権自由ノ説年ニ到ル処ニ高クリノ勢盛ナリ、十五年四月関西自由党總會ヨリ脳マレトス、途上岐阜ニ於テ相原尚毅ノ刺ス所トナリ胸部ヲ傷ケ人皆色ヲ失フ、退助自若トシテ曰ク「板垣死ストモ自由ハ亡ビズ」ト既ニシテ傷癒エ同年渡欧シ、佛國ニ止リ文物制度ヲ視察ス、滞欧三年ニシテ帰朝ス、二十年勲功ニヨリ特ニ華族ニ列シ伯爵ヲ授ケラル、退助カネテヨリ爵位階級ノ制ヲ喜バザルヲ以テ固辞ス、聴カレズ。明治二十三年帝國議會ノ初開ニ当リ未ダ議院ニ慣レテハ常ニ退助ノ率ユル自由党員ソノ三分ノ一ヲ占メ、大隈重信ノ率ユル進歩党ト提携シテ政府ニ当リ、経費節減、民力休養ヲ主眼トシ大ニ悪政擁護ノ実果ヲ結ビタリ。初メ退助等ガ民撰議院ノ論ヲ唱ヘテヨリ十六年、是ニ至リ始メテ立憲政体ノ樹立ヲ見ル、衆運ノ然ラシムル所ナリト雖ホ退助等ガ終始一貫ソノ主張ニ努メタルモ功與リテ大ニ力アリ。

明治三十一年自由進歩両党合同シテ憲政党ヲ組織ス、乃チ旧派首領勅命ヲ奉ジ聯立内閣ヲ組織ス、大隈重信首相トナリ、退助内務大臣トナル、幾クモナク内閣瓦解ス。三十三年見ル所アリテ憲政党総理ノ職ヲ伊藤博文ニ譲リ自ラ政界ヲ退隠シ、専ラ社會事業ニ意カス。博文憲政党ヲ改メテ政友會ト称シ、ホ後引続キ本邦政党ノ眼目トナレリ。退助先ニ至ルモ曠ク錬トシテ衰ヘズ、余生ヲ社会事業ニ捧ゲ、東奔西走殆ド寧日ナシ、性又窮ヲ慾ニシテ財利ニ淡白ニ生涯清貧ニ安ジテ晏如タリ大正八年病ヲ獲テ、七月十六日危篤ノ旨天朝ニ達スルヤ、特旨ヲ以テ後ニ陞叙セラル、同日薨ズ享年八十三。孫守正家ヲ嗣ギ退助ノ志ヲ奉ジテ醸裏岳財セズ、代華族

論ヲ遂行セリ。

二、片岡健吉　幼字寅五郎、名ハ益光、後通称ヲ以テ行ハル。高知城下中島町ニ住ス代々藩主山内氏ニ仕ヘ馬廻格ニ班シ、禄二百五十石ヲ食ム。文久元年十九才ヲ以テ藩主山内豊範ノ小姓トナル。翌三年土佐吾川長岡三郡ノ郡奉行トナリ、専ラ海防ノ事ニ任ズ。尋デ足軽大将ニ任ゼラレ、又香美郡奉行ニ転任ス。慶応元年長州征伐ノ時藩ニ先チ上阪シ再ビ足軽大将ニ任ジ近習物頭格ニ進ミ、翌年帰国レ郷士隊長ヲ命ゼラル。是ヨリ先勤王ノ同志ニ列シ、郡奉行参政加役兼帯トナル。明治元年東征軍ニ従ヒ、谷守部ト共ニ大軍監ニ任ゼラル。戦功大ナリ、凱旋後朝廷賞ヲ賜ス。藩主亦其功ヲ賞シ、格式中老職ニ進メ禄二百石ヲ加増ス。当時藩ノ参事ニテ軍務係トナリ、財制改革、兵制改革等ヲナシ功アリ、四年朝命ヲ以テ海外ニ渡航シ米、英、仏等ノ兵制ヲ視察シ、五年帰朝ス。仝年海軍中佐ニ任ゼラル。時ニ征韓論正ニ勃興シ後藤板垣ノ諸参議皆職ヲ辞ス。健吉モ亦職ヲ辞シ、愛国公党ノ組織ニ着手ス。七年林有造等ト土佐ニ立志社ヲ創立シ旧藩ノ子弟ヲ郷導シテ時機ヲ待ツ。十年西南ノ役起ルヤ、六月立志社総代トナリ、西京行在所ニ至リ、民撰議院設立ノ建白書ヲ捧呈ス。此時林有造等ハ兵ノ企アリ。健吉ハレニ坐シテ禁獄百日ニ処セラル。十二年高知県会議長トナリ、閭モトリ之ヲ辞ス。十三年河野広中ト二人有志総代トナリ国会開設ノ請願書ヲ太政官ニ捧呈ス。十四年立志社ヲ改メ自由党ヲ設立シ、総理ニ挙ゲラル、翌日之ヲ辞ス。爾来憲政ノ為ニ奔走シ、殆ト寧日ナク、諸国ノ倉同ヲ設立シ、推サレテ領袖トナル。十八年、甚大ナル改革ヲ高知県会ニ施行シ、明治二十年、言論集会、出版三大自由権請願ノ為メ県民総代トナリ上京ス。政府保有条令ヲ発シテ有志ヲ都下ヨリ駆逐ス。健吉為メニ罪ヲ受ケ、石川島ノ獄ニ繋ガル。二十二年、憲法発布ノ際大赦ヨリ出獄ス。翌年国会初設ノ時ヨリ選ガレ、高知県代議士トナリ、林有造、竹田正久等ト共ニ自由党ノ領袖ニ推サレ、代ニ憲務ニ当粋ス。二十五年

十二議會ヨリ、衆望ヲ以テ衆議院議長トナリ、老練公平能クソノ職ヲ盡ス、德望院ノ内外ニ隆々タリ、蓋シソノ人ト為リ、温厚至誠ニシテ玲瓏玉ノ如ク、而モ意思堅固ニシテ凜乎犯スベカラザルノ致ス所ナリ。

三十四年伊藤侯ノ政友會ヲ組織スルヤ、ソノ總務員ヲ囑セラル、三十五年、同志社社長兼校長ニ推サレ、三十六年、日本基督傳道局總裁ニ推サル、後感ズル所アリ、一時政友會ヲ脱ス、同年三月病ニ罹リ帰縣療養ス、十月特ニ正四位勲三等ニ叙セラル、十一月四日病愈漸ム、天皇陛下ヨリ御菓子料若干ヲ下賜セラル、同日遂ニ卒ス、享年六十一、葬儀ノ日勅使来邸シ祭粢料ヲ賜ハル。

三、高屋友右衛門　名ハ長豪（ナガヒデ）　家代々土佐藩主山内公ニ仕ヘ、馬廻格ニ斑ス明治初年監察役タリ、明治二年少参事軍務局参務兼学校主務タリ。後職ヲ辞シテ實業界ニ入リ高知國立第百廿七銀行ノ頭取タリシコトアリトイフ。後專ラ長豪ヲ用ユ。

四、高屋左兵衛　高知藩ノ四國會議出席重役トシテ明治二年四月丸亀ニ出張シ、仝會創設初會ノ同會者タリシ人。前記友右ヱ門トハ別人ニシテ。明治二年十一月頃ニハ高知藩西京邸務局少参事（五）ヲ務メタリ。

五、桑原平八始名倉之進土佐藩士ニテ勤王家ナリ。

六、本山只一郎茂任ハ初メ左逸兵衛猛亥ト称シ、次デ只一郎茂樹ト改メ明治維後更ニ只一ト改メ晩年ハ茂任ヲ専用フ。家代々山内家ノ宿從格ニテ祿二百石ヲ食ム。茂任長ジテ容堂ノ側扈從トナル、伏見ノ役後錦旗二旒ヲ藩主ニ賜ヒ松山高松二藩ノ征討ヲ命ゼラル、茂任錦旗ヲ奉ジテ國ニ帰ル、途中豫州川之江ニ於テ高松征討ノ軍ニ會シ錦旗ヲ總督深尾丹波ニ授ケ進ンデ豫州久万山ニ到リ藩ノ惣宰深尾帯刀ニ捧ケ進デ松山ニ入ル、松山城主恭順ヲ表シ城ヲ出テ降伏謹慎ス、仝元年五月平定シテ國ニ帰ル、三年正月高知藩権大参事ニ任ジ四年正月王政復古ノ功ヲ以テ賞典祿五十石ヲ賜ハル、仝年十一月松山縣参事トナリ、次デ茨木縣及

水澤縣權參事、司法省第二局ニ勤仕シ八年十月病氣ニヨリ依願退職
セシガ仝十年六月伯父主税ノ跡ヲ襲ヒ士族ニ列シ次デ春日神社、加茂御祖神社
大和神社、大神神社等ノ宮司トナリ、明治廿年八月廿八日病ニデ
卒ス。享年六十二。

七、林　勝兵衛　名ハ勝好（カツヨシ）トイフ後東ヲ勝好ヲ用フ。高知城下
中島町ニ現今其縣本太郎將軍邸ニ住ス、家代々馬廻格ニテ
五百五十石ヲ領ス、明治維新後ハ藩吏トナリ明治三年三六三等
官少參事軍務局參務タリ、後山内侯爵家ノ家扶トナリ、
居ヲ東京ニ移ス、仝廿二年頃仝家扶ヲ辭シテ鄉里ニ歸住セシガ
後病ニ罹ル。

八、谷守部　後改テ干城トヲフ、隈山ト號ス、土佐藩儒谷秦山
五世ノ孫ナリ、安積艮斎、安井息軒等ニ師事ス、歸リテ致道
館ノ助教トナル、明治元年戊辰ノ役、軍監トシテ參加シ
戰シテ功アリ、凱旋後藩主感賜ヲ賜フ、仝三年土肓高知藩

少參事軍務局參務トナル、仝五年陸軍少將ニ任ジ、十年ノ役
熊本鎮台司令長官トシテ孤城重圍ノ裡ニ在テ大奮闘能ク天
下ノ大勢ヲ支持得タルハ實ニ不朽ノ功績ナリ、仝十七年學習
院長トナリ子爵ヲ授ケラル、
尋デ農商務大臣トナリ、又貴族院議員ニ選バレ、各要職ヲ
兼任シ常ニ侃諤ノ議論ヲ以テ時敝ヲ痛作シ、院ノ内外ニ德
望高カリシガ明治四十四年五月病デ薨ズ、時ニ年七十五。

九、松下與膳　名ハ綱武、鳳谷ト號ス。家代々山内侯ニ仕ヘテ祿十
三石ヲ食ム、與膳天保十年八月廿三日ヲ以テ生ル。幼ヨリ文武ヲ励
ミ、特ニ漢籍ノ造詣深カリキ、方ニ延元年浪華警衛ヲ命ゼラレ、五人
扶持十石ヲ給セラル、翌三文久元年住吉陣営ニ轉ジ、七人扶持廿五
石ヲ給セラルゝニ至ル、國ニ還リ文館助教トナリ次デ學問修行ヲ
命ゼラレ、時勢探索係ヲ兼テ江戸ニ遊學ス、元治元年致道館ノ
教授トナル、時年廿六、明治元年正月文館教授兼少監察軍備

（附録）

係ヲ命ゼラレ、仝二年二月藩命ヲウケテ四國列藩ヲ説ク。説ヲ終テ四國會議開設ノ議ヲ建ム。次テ仝年四月四國會議用係ヲ命ゼラレ、大監察高屋左兵衛、大隊司令横山正作、小林守大郎等ト議ヲ凝ラシ、已後三等官文館教授、中老格ニ進メラレ、後又海南分校一等教師、高知中學校教諭兼幹事、高知師範學校長心得、赤岡中學校長心得等ニ歴仕ス。後老ヲ以テ職ヲ退キ本町ノ邸ニ閑居ス、大正七年八月十日卒ス、享年八十才（松下綱武ノ自叙傳、鳥谷先生傳ニヨル）。

十一、小林守太郎、高知縣士族ニテ明治三年十月頃ハ第三等官軍艦乾作七　後名ヲ和民ト改ム高知藩ノ勤王ニテ明治三年頃ハ藩知事府少参事ヲ勤ム。

司令兼監察ヲ勤ム

十二、渡辺弥久馬、後前藤利行ト改ム、高知城下大川筋ニ住シ後仝通

年齢ニ住ス、代々山内氏ニ仕ヘテ禄百石ヲ食ム、少壯文武ヲ励キ、夙ニ志士ノ称アリ、性寛裕ニシテ能ク人ヲ容レ、尤モ吏材アリ十三、代藩主豊熙ニ仕ヘ御側物頭トナル、此際馬渕嘉平有為ノ材ヲ以テ大ニ用ヒラレ一世ヲ風靡スル当時ノ後材皆其下ニ集リ相聲援シテ藩ノ枢機ヲ握リ利行亦其党タリ、已ニシテ反對党大ニ起リ嘉平等ヲ目シテ姦党ト称シ遂ニ之ヲ排陥ス利行亦坐シテ免職セラル、嘉永中、吉田東洋藩堂ノ抜擢ヲ蒙リ参政トナル、利行ノ才幹ヲ知リ屢ゝ之ヲ擢用シ御側物頭トナス、世ニ東洋ノ挙用セル人材ヲ目シテ新おこぜ組トイフ、利行カクテ旧新おこぜノ眼目タリ、已ニシテ安政ノ初、近習目附トナリ仝三年頃ヨリ始メテ藩ニテ士格銃隊ヲ組織スルヤ軍備用兼帯トナリ其操練教授ニ任ズ。愛応中仕置役ニ進ム仝三年七月長崎ニ於テ土人英艦水兵殺害ノ問題起リ公使代理（サトウ）軍艦ニ乗ジ須崎ニ来ル利行乃後藤象二郎ト共ニ談判委員トナリ折衝宜シキヲ得事

各上達ス

終ニ治マル、明治中興ノ後新政府ニ仕ヘ旧氏名ヲ改メ齋藤利行ト称ス後昇進シテ元老院議官ニ至ル。明治十四年五月廿六日卒ス、享年六十

十三　中村観一郎　名好正通称観一郎後母貫一郎ト称シ更ニ母貫一ト改ム、夏玉ト號ス、城北江ノ口村小津ニ生ル、世々山内氏ニ仕ヘ禄二百石ヲ食ム土佐勤王ノ一人ナリ、維新ノ初大監察トナリ、明治二年川之江屬民政局ニ勤務シ金陵會議ニ出席ス、仝四年権少参事ヨリ権参事ニ進ミ香川縣参事石鐵縣参事等ニ歴任ス。石鐵縣発セラルルニ及ビ仝五年山梨縣ニ出仕シ尋デ職ヲ辞ス。人トナリ明敏ニシテ材幹アリ議論風發縣河ノ如シ拾年西南ノ役起ルヤ林有造ノ畫策ニ與シ挙兵ノ企ヲナシ銃器弾薬ノ購入ニ着手ス已ニシテ事露ハ午一年五月縛ニ就キ八月大審院ニ於テ禁獄三年ニ処セラレ青森監獄ニ幽セラレ翌年獄中ニ卒ス享年三十六。

十四　宮地彦三郎、名ハ貞雄、通称ハ初メ庫吉（蔵吉ト書ケルモアリ）、脱藩中ノ変名多シ、画工省兵衛、松原三樹進、梅園實紀卿ノ末勤侍佐々木三樹進、神田淳次郎等皆ソノ変名ナリ。文久三年脱藩（土佐藩士ニテ仝京都別邸勤務中）シテ専ラ京摂ノ間ヲ奔走シ諸国勤王ノ士ト交ル、慶応三年海援隊長坂本龍馬上洛スルヤ仝隊ニ入リ坂本ノ秘書長岡謙吉共隊務ヲ来ニトル、坂本龍馬遭難ノ夜ハ折柄浪華ヨリ帰洛シテ下宿ニ着キテ間モナク凶報ニ接シ直ニ駈付ケ、其後仝隊ノ戦友陸奥陽之助ヤ陸援隊ノ齋原治一郎等十数人ト共ニ三浦久太郎ノ宿ナル天満屋ヲ襲撃シテ隊長ノ復仇ヲ図リ或ハ豫讃天領地御預リ所鎮撫ノ命ヲウケ讃州塩飽一揆ヲ討平シ或ハ高松征討ノ軍到ルニ先チ仝藩ニ恭順勧告ニ盡カシ或ハ四國會議（名金陵会議）ノ開會ニ盡力シ或ハ琴平町ノ街路治水工事ヲ始メ町治ヤ繁栄策ノ樹立ニ努力シタル等功績尠カラズ明治二年職ヲ辞シ、後西京出張所誥、伊勢神宮、度會縣等ニ歴仕シ、小学校設置ノ際、感ズル所ヤアリケン俄ニ官

ヲ辞シテ帰郷シ爾来明治三十九年ニ至ルマデ三十余年尚初等教育ニ従ヒ育英奉公ニ勤ム、大正五年七十八ニテ病歿ス。

彦三郎資性温厚名利ヲ喜バス、終生清貧ニ安シ、常ニ至誠報国ヲ念トス、香川縣仲多度郡本島村ハ彦三郎昔日治下ノ地ナリ、村民彦三郎等ノ遺徳ヲ追慕シテ仝村小坂ニ一祠ヲ建テ、其靈ヲ祀ル（但在世中ノ創立）ナサ三神社トイフ。今大山祇神社ト合祭ス（仝神社奉祀神職高倉厚三氏報告）。

十五、川原塚茂太郎、名ハ重幸、高知城下南奉公人町ニ住セリ武市瑞山同盟ノ勤王家ニシテ明治元年六月軍事係徒目附ニテ北越征伐軍ニ従ヒテ功アリ十一月凱旋ス、仝二年七月金陵会議誥トナリ、仝十二月川之江民政局副参務ヲ以テ引續キ琴平ニ出張ス、三年八月本藩ニ召帰サレ仝四年三月権大属トナル、仝六年教部省出仕トナリ、仝九年二月国事犯ノ嫌疑ニテ東京警視廳ニ拘留中仝九月病死ス、

十六、田岡小文、名ハ正路、後正躬トイフ、通称ハ喜之助又祐吾トモイヘリ。武市瑞山同盟ノ勤王家ナリ、天保六年五月ヲ以テ生ル、七才ニシテ父文次郎死シ、専ラ母ノ教養ヲ受ク、廿七才ニシテ母又死ス。文久三年武市瑞山等ノ獄ニ投ゼラルヤ正躬同志廿九名ト共ニ藩ニ出頭シ其幽囚ヲ解カンコトヲ願ヒ面陳頻ニ力ム、明治二年藩制改革ノ際、抜擢セラレテ山内藩主ノ直臣ニ挙ラル、蓋シ家代々倍臣ニシテ正躬ハ山内下總（勤王家ニシテ後氏名ヲ改メテ酒井勝作トイフ）ノ家士ナリキ、仝年十二月金陵會議出張ヲ命ゼラレ三年七月仝出張ヲ免ゼラル、後土佐郡小高坂村々長（現今高知市小高坂）ニ上ゲラレ頗ル治績アリ明治三十六年八月病テ卒ス、享年六十九、

十七、島村祐四郎名ハ雅薫、通称寿太郎、洲平等ト称セリ、高知城下新町田渕ニ住セリ、家代々郷士ニシテ裕福ナリ、武市瑞山ノ妻ノ弟ナリ、祐四郎性寛宏勤王ノ志厚ク一族皆勤王ニツトム、祐四郎自ラ同志ノ為ニ資ヲ投シテ其挙ヲ助ク然レ氏常ニ沈重ニシテ

（附録）

用意周到ナリケレバ瑞山ノ大獄ノ時モ其厄ヲ免カレ、明治元年東北征討ニ従軍シテ功アリ、凱旋帰国ノ後、執政ヨリ金百疋及ビ川之江ニ出張セシコトアリ、後宮ヲ辞シテ閑居ス。明治六年十一月廿六年四十二、明治三十一年七月勤王ノ功ヲ追賞シテ正五位ヲ贈ラル。

十八、島村寿郎、初メ寿之助ト改ム、高知藩ノ郷士ニシテ新町田渕ニ住ス、武市瑞山ノ妻富子ノ叔父ナリ、鏡術ノ達人ニシテ世ニ知ラル。瑞山ヲ輔ケテ王事ニ勤メ常ニ同志ノ為ニ家資ヲ投シテ之ヲ助ク。文久三年九月獄ニ投ゼラレ幽因三年ニシテ罪ヲ赦サル、直ニ京都藩邸留守居役ヲ命ゼラル。明治二年金陵会議所ヘ出張ヲ命ゼラル、慶藩後陸軍司法両省ニ出仕シ後辞職帰国ニ帰ル。明治十八年七月六十四才ニテ卒ス。明治三十一年七月生前勤王ノ勲功ニヨリ正五位ヲ贈ラル。

十九、桑原譲　通称ハ助馬又介馬トモ書セリ、高知藩ノ郷士ニシテ幡ヲ

郡蕨岡村ニ住セリ、文武両道ニ達シタル勤王家ナリ、明治戊辰ノ役ニ従軍シテ陸目附役トナル、仝二年軍功ニ依リ擢ラレテ御留守居組トナリ、金陵会議ニ出張ヲ命ゼラル、仝三年重務官軍曹トナリ次デ大隊救頭兼公務人トナル、四年正月東京邸会計刑法用係（官禄五十石）ニ、仝三月高知藩大属ニ任ゼラレ兵部省出仕トナル、仝七月民部省出仕ヨリ諸官ニ歴任シテ遂ニ東京府権典事ヨリ遷ル。

廿、森脇唯次郎、名ハ重成（高知藩勤王人名録ニヨル）後推一ト改ム、明治維新後川之江民政局詰、金陵会議出張、高知県御預所出張員、九亀県大属等ヲ勤メシ人ナリ、

廿一、田中次太夫　宇和島藩ノ士ニシテ禄百弐十石ヲ給セラレシ御船奉行ノ家ニ生ル、当時藩中屈指ノ俊材ニシテ、数回金陵会議ヘモ出席シタルコトアリ。

（附録）

廿二、鈴木源吉　家代々宇和島藩ノ砲術師範ヲ勤メ、中士ニテ四人扶持十俵ヲ給セラレシ源吉ノ勤功ニ依リ、源吉ノ一代ニ限リ、都ニ於テ活動セリ明治二年四国会議ニ出張ヲ命ゼラレシコトヨリ後姓名ヲ改テ物部保満ト称シ明治三四年頃ニハ郡長ナド勤メシコトアリトイフ。

廿三、須藤但馬　宇和島藩ノ上士ニシテ禄百廿石ヲ食ム家柄ノ人ニシテ枢機ニ関係セル偉人ナリ。脱藩四位勤王家林玖十郎ナドハ此人ノ指導ヲ受ケテ活動セルヲ以テナリ。

廿四、河原治左衛門　宇和島藩ノ上士ニシテ禄百三十石ヲ給セラレ大監察ヲ勤メタル人ニシ明治二年四月朝日金陵会議（出張ノ命ヲ受ケタルコトアリ。

廿五、上泉郷介　宇和島藩ノ中士ニテ四人扶持十俵ヲ給セラレシ明治二年四月十三日金陵会議出張ヲ命ゼラレシ人ナリ。

廿六、遠藤元行　宇和島藩士ニテ身分低カリシモ当時ノ英才ナリシ

伊達侯留所家日記ニ明治四年金陵会議ヨリ帰藩セシコトヲ記セリ、

廿七、不破忠次郎　後武衛ト称ス宇和島藩ノ上士ニテ禄百石ヲ受ケ、大参事ニテ当時有名ナル人物ナリキ。

廿八、加藤虎二郎　宇和島藩ノ中士ニテ儒者ナリ、藩学ノ教授ヲ勤ム後自棄ト称ス明治二年監察ヲ命ゼラレシ人ナリ。

廿九、川名謙蔵　土佐藩ニ使者トシテ来藩セル由。

卅、川名謙蔵モ会藩ノ中士ニテ四人扶持十六俵ヲ給セラレシガ元治慶応ノ頃ヨリ剛腹方（外交掛）ニテ京都ノ勿論他藩ニ往来シテ外部ノ交掛ニ当リタル練達ノ士ナリキ。（ヲ乙ノ全廿九記ノ文頭氏ノ報ニヨル）。

卅一、飯渕縫　縫殿ノ縫ト改メ後吏員ニ転ジ能クス入、吉田藩ノ家老職ニシテ其幕末ノ際慶応藩主佐幕論ヲ諫争シテ聴カレザリシガ明治維新後藩ノ大参事トナリ四国会議ニ出張ヲ命ゼラレシ人ニシテ弁論ニ長ズ各藩士、以テ小藩ニ過ギタル宏量ナリト称場セリトイフ、諸藩ノ名士ニ交リ、就中高知藩人ニ交

リ多ク特ニ板垣退助ト親交アリシカ明治十年南豫ノ変即チ
テ遥ニ西郷隆盛ノ挙ニ応ジ総督ニ擁セラレタリ（豊川英吉氏報ニ
世一、甲斐順宜 吉田藩ノ士ニテ四国会議ニ出張ス（兵頭氏報）
世二、野中久徴、松山藩士ニテ明治三年全藩会議ニ
木重遠ニ副トシテ出張セル人（后）司法判事、将山中学校長トナリシ人、
世三、池上邦五郎、名ハ忠古、今ハ
都御留守居役（公用人）トナリ
月八日権少参事トナル 仝三年九月十二日在京平ノ全藩会議ニ出席
ヲ命ゼラレ仝十三日若党忠太ヲ召連レ出発ス、琴平ニ到着後仝
十七日ヨリ議会開ケ毎日出席中、一夜旅館ニ於テ自刃ス、原因
不明ナリ。
世四 **土**肥文作、初メ猪太郎ト称シ後大作ト改ム、号ハ猛輝、詩香又
甲山ト称ス、実光ハ其諱ナリ、天保八年丁酉九月二日丸亀塩飽
町ノ邸ニ生ル、天性淵達慷慨気節アリ、壮ニシテ頑悟安政三年十二月藩

学正明館ノ向讀師ニ補セラル 仝四年自ラ乞フテ江戸ニ遊ビ幕
府ノ儒者羽倉外記ニ従学シ轉ジテ昌平黌ニ入ル常ニ皇室ノ衰
頽ヲ慨キテ尊王ノ大義ヲ唱ヘ藩政ノ不振ヲ憂ヒ奮テ皇威挽回
藩政一洗ノ策ヲ講ズ仝六年正月帰藩シテ弟七助実忠ト議リ
兄弟内外ニ在リテ国事ニ盡サンコトヲ誓ヒ七助ヲシテ藩ヲ
脱シ草莽ノ志士中ニ投ゼシメ自ラモ長ノ高杉、品川、久坂、土ノ
中岡、清岡、田ノ河田佐守博ク天下ノ志士ト交リ藩ヲ奉ジテ王事ニ
勤ムルヲ已ノ任トシ日夜周旋盡粋スル処アリ遂ニ藩廳莫
府ノ嫌疑ヲ恐レテ俄然實光ヲ高林小十郎ノ邸ニ幽閉ス明治
元年正月王政維新ニ際シ先ヅ免ゼラレ藩其処置ヲ解ク幾モナリ伏見
ノ役後高松征討参謀トシテ同松征討ノ年加ハリ功アリ仝年六
月庶士ヲ以テ三河県判事ニ転ジ東京ニ在テ藩ノ
大参事同藩在東京公議人、民部省出仕、大蔵省出仕、新治県
参事等ニ経仕シテ各地ニ赴任シ、明治五年壬申廿四日常州土浦ノ邸ニ

於テ屠腹シテ卒ス、享年三十六大正八年十一月十五日正五位ヲ贈ラル。

附録終

昭和九年二月二十八日印刷
昭和九年二月二十八日發行

編纂者　高知縣香美郡立田村五十五番屋敷　宮地美彦

印刷兼發行者　高知市帯屋町四百六十二番地　小島拓三

發行所　高知市帯屋町四百六十二番地　白洋社書店

（非賣品）

終

353
639